

# 淨土江遺跡

宮崎市文化財調査報告書

第 6 集

1981

宮崎市教育委員会



序

浄土江遺跡は、宮崎市街地の東部、国鉄宮崎駅の東に接する旧宮崎刑務所構内に発見されたものであります。この遺跡を含む東部市街地は、近年、急激な都市化の様相を呈しているところでもあり、昭和51年6月の宮崎刑務所移転に伴って、なお一層の再開発が進められているところでもあります。

遺跡の主体部を包含する刑務所跡地につきましては、宮崎市が國より土地の払い下げと借地によって、今後、文化の森構想のもとに公園や各種文化施設を建設する計画がもたれております。

今回の調査は、こうした計画に先だっての調査となり、宮崎市教育委員会が主体となって昭和52年から54年にかけて第3次発掘調査まで実施したものであります。

調査では、当時の建造物の存在した中央部及び東部におきましては、遺跡の保存状態が悪い状況にありました。西部におきましては、包含層が深くなることもあって、住居跡や溝状構造の検出がみられました。検出された住居跡は25基を数え、古墳時代から奈良時代にかかる生活跡であることが判り、宮崎県内におきましても、この時代の生活跡の調査は初めてのこととありました。

また、第2次発掘調査におきまして検出いたしました良好な住居跡及び溝状構造につきましては、遺構内に砂を埋め、その上部に埋土するといった保存策も構じております。

浄土江遺跡の発掘調査は、宮崎市単独の調査であって、調査面積が2,000m<sup>2</sup>に及ぶ、かつてない発掘調査となりました。調査を終了してみると反省点が多いことを痛感せられるところであります。

しかし、市街地の中で、これだけ広面積の発掘調査区を確保し、住居跡等の検出に努められたことは、意義深いものと考えます。

本報告書が、関係各位の参考となるとともに、文化財保護の一助となれば幸いです。

この報告書刊行にいたるまでに、発掘調査はもとより、資料整理、編集等にあたられた各位に深甚の謝意を表します。

昭和56年3月31日

宮崎市教育長 黒木定彌

## 例　　言

- 本書は、宮崎市教育委員会が、昭和52年8月16日から8月26日（第1次調査）、昭和53年11月28日から12月28日（第2次調査）、昭和54年10月15日から11月3日（第3次調査）まで実施した、浄土江遺跡の発掘調査報告書である。
- 発掘調査には、田中茂、石川恒太郎、茂山謙、野間重孝、北郷泰道があたり、資料整理には、野間重孝、北郷泰道があつた。
- 本文の執筆は、野間重孝があつた。
- 挿図の実測及びトレースについては、北郷泰道が行ない、一部、野間重孝が行なつた。
- 写真撮影は、野間重孝が行なつた。
- 本書の編集は、野間重孝が行なつた。
- 本書における住居跡の名称番号については、検出の早かったものから順序に番号を振つたので、統一性を欠いた点がある。また、第1次調査検出住居跡を100番代、第2次調査検出住居跡を200番代、第3次調査検出住居跡を300番代としている。
- 本書における出土遺物は、宮崎市教育委員会が保管している。

昭和56年3月

宮　崎　市　教　育　委　員　会

監修者　伊藤信義

監修者　伊藤信義

## 本文目次

I	はじめに	1
II	遺跡の立地と環境	3
III	調査の経過と概要	3
IV	第1次発掘調査	5
1.	A—2区調査区	5
(1)	A—2区の層位	5
(2)	A—2区の遺構（101号、102号、103号住居跡）	5
(3)	A—2区出土遺物	6
2.	E区（104号、105号住居跡）	7
3.	B、C、E区出土遺物	7
4.	F区（1～3トレンチ）	8
(1)	F区の層位	8
(2)	F—1区出土遺物	8
(3)	F—3区の遺構（106号住居跡）	8
V	第2次発掘調査	12
1.	層位	12
2.	住居跡と出土遺物（201号～210号住居跡）	12
3.	溝状遺構（1号～10号溝）	27
4.	溝状遺構出土遺物及びその他の出土遺物	28
5.	土層観察トレンチと出土遺物	29
VI	第3次発掘調査	30
1.	層位及び住居跡内の土層推積状況	30
2.	住居跡と出土遺物（301号～309号住居跡）	31
3.	溝状遺構と出土遺物	36
(1)	溝状遺構（9号～15号溝）	36
(2)	溝状遺構出土遺物	37
VII	まとめ	40
1.	住居跡	40
2.	溝状遺構	42
3.	炉跡及び窯	42

## 挿図目次

第1図	浄土江遺跡位置図	2
第2図	浄土江遺跡発掘調査区位置図	4
第3図	浄土江遺跡A-2区東壁土層図	5
第4図	浄土江遺跡A-2区遺構図（101号～103号住居跡）	5
第5図	A区出土土器実測図	6
第6図	浄土江遺跡E区遺構図（104号、105号住居跡）西壁土層図	7
第7図	B、C、E区出土土器実測図	8
第8図	F-1区、F-2区出土土器実測図	9
第9図	浄土江遺跡F-3区遺構図（106号住居跡）土層図	9
第10図	F-3区出土土器実測図	10
第11図	浄土江遺跡202号住居跡周辺土層図	12
第12図	201号住居跡実測図一同炉跡実測図	13
第13図	201号住居跡出土土器実測図	14
第14図	201号住居跡出土土器実測図	14
第15図	202号、203号住居跡実測図	15
第16図	202号住居跡出土土器実測図	16
第17図	202号住居跡出土土器実測図	16
第18図	203号住居跡出土遺物実測図	17
第19図	204号住居跡実測図	18
第20図	204号住居跡出土土器実測図	18
第21図	205号、209号住居跡実測図	19
第22図	205号住居跡出土遺物実測図	20
第23図	206号住居跡実測図（206号住居跡出土土器実測図）	21
第24図	207号、208号住居跡実測図	22
第25図	208号住居跡出土土器実測図	22
第26図	209号住居跡出土土器実測図	24
第27図	210号住居跡実測図	25
第28図	210号住居跡出土土器実測図	26
第29図	溝状遺構出土土器及びその他の出土土器実測図	29
第30図	土層観察トレンチ出土土器出土状況	29
第31図	土層観察トレンチ出土土器実測図	29
第32図	309号住居跡露出南北断面土層図	30
第33図	301号住居跡出土土器実測図	31
第34図	303号住居跡出土土器実測図	31

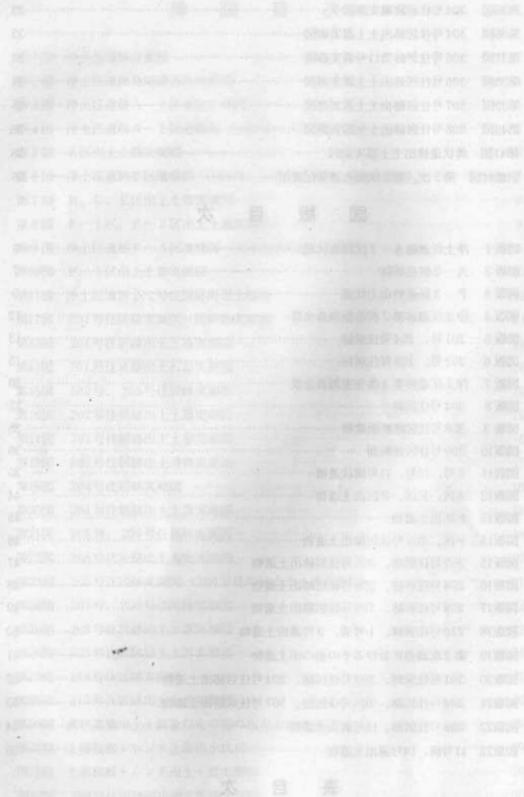
第35図	304号住居跡竪窓実測図	33
第36図	304号住居跡出土土器実測図	33
第37図	305号住居跡第11号窓実測図	34
第38図	305号住居跡出土土器実測図	34
第39図	307号住居跡出土土器実測図	35
第40図	308号住居跡出土土器実測図	35
第41図	溝状遺構出土土器実測図	38
別添付図	第2次、第3次調査遺構配置図	56

## 図版目次

図版1	浄土江遺跡A-2区調査状況	6
図版2	A-2区住居跡	7
図版3	F-3区遺物出土状態	9
図版4	浄土江遺跡第2次発掘調査全景	12
図版5	201号、204号住居跡	13
図版6	202号、203号住居跡	15
図版7	浄土江遺跡第3次発掘調査全景	30
図版8	304号住居跡	32
図版9	308号住居跡断面遺物	35
図版10	309号住居跡断面	36
図版11	9号、10号、11号溝状遺構	36
図版12	A区、E区、F区出土遺物	44
図版13	F区出土遺物	45
図版14	F区、201号住居跡出土遺物	46
図版15	202号住居跡、203号住居跡出土遺物	47
図版16	204号住居跡、205号住居跡出土遺物	48
図版17	208号住居跡、209号住居跡出土遺物	49
図版18	210号住居跡、1号溝、9号溝出土遺物	50
図版19	第2次調査におけるその他の出土遺物	51
図版20	301号住居跡、303号住居跡、304号住居跡出土遺物	52
図版21	304号住居跡、305号住居跡、307号住居跡出土遺物	53
図版22	308号住居跡、11号溝出土遺物	54
図版23	11号溝、14号溝出土遺物	55

## 表目次

第1表	F-3区出土遺物観察表	11
第2表	第3次調査溝状遺構出土土器観察表	39



## 大　目　標

## 大　目　表

## I はじめに

淨土江遺跡の発掘調査は、昭和51年6月の刑務所移転を契機に始められ第3次調査まで実施するに至った。第1次発掘調査は、昭和18年に宮崎刑務所より発刊された「宮崎刑務所構内遺構及び遺物に就て」の報告書を基にして所内西南角にあたる医務所や病舎、扇形運動場周辺にA～D区、拘置場東側にE区、中央看守所の北側櫛水塔の西南位置にF区の調査区を設定して行なったが、A区において3基の住居跡が切り合い状態で確認され、E区では2基分、F区では1基分の住居跡が確認された。しかし、遺構は特殊な施設が建てられていたこともあって、いたるところが掘削されており、その残存状態は極めて悪い状態にあった。

第2次調査は、跡地の利用計画が決った建造物撤去後の昭和53年に実施した。この調査では、当初、所内西側壁に沿ったトレーナによる発掘調査を実施していたが調査の進行につれて住居跡や溝状造構の発見が相次ぎだため、調査面積の拡大と調査期間の延長を行なうことになり多面的な発掘調査となつた。この調査では、遺構の集りを南側と北側に分けることができ、南側においては4基の住居跡を確認したが、それらは各々、溝状造構を伴うものであり、北側では6基の住居跡が各々、切り合う状態で確認された。

第3次調査は、昭和54年の公共下水道床渠築工事に伴って、第2次調査区西側の市道部分を対象に実施した。この調査では、第2次調査で確認した住居跡や溝状造構の拡がりをみるとことができ、新たに9基分の住居跡を確認することができたが道路下ということでもあってガス管等の敷設物が遺構を破壊しており、完全な状態での遺構はろることができなかつた。

### 第1次発掘調査團の構成（昭和52年8月16日～同年8月26日）

調査主体	宮崎市教育委員会
調査員	田中 茂（国富小学校教諭）
調査担当者	野間重孝（社会教育主事）
調査協力	沢 皇帝（福岡市文化課）、北郷泰道（宮崎考古学会員）
調査補助員	福尾正彦（九州大学）、加治木草成、足立宏美、渡辺康隆、東 光一、緒方昭彦 花田良彦、浜川道也、上山伸二、若林昭彦、浦 民雄（以上、宮崎大学史学研究部）
事務局	宮崎市教育委員会 教育長 渡辺義夫 教育次長 朝飛初美 社会教育課長 大島清一 同補佐 結城嘉嘉 主事 甲斐克美

### 第2次発掘調査團の構成

調査主体	宮崎市教育委員会
調査員	石川恒太郎（宮崎市文化財審議会委員） 茂 山 譲（県総合博物館学芸員）

調査担当者 野間重孝（社会教育主事）

北郷泰道（社会教育指導員）

調査補助員 石川博久、安藤忠親、辻 真一郎、中崎芳廣、神田慎一

花田良彦（宮崎大学史学研究部員）他9名

宮崎大学、南九州大学、宮崎実業高校生

事 務 局 宮崎市教育委員会

教育長 黒木定彌 教育次長 長友 平

社会教育課長 結城康嘉 同補佐 松山耕吉 同主事 甲斐克美

### 第3次発掘調査団の構成

調査主体 宮崎市教育委員会

調査担当者 野間重孝（社会教育主事）

北郷泰道（社会教育指導員）

調査補助員 熊本組（下水道埋立工事請負業者）作業員

事 務 局 宮崎市教育委員会

教育長 黒木定彌 教育次長 長友 平

社会教育課長 赤崎寿人 同補佐 松山耕吉 同主事 菊池 進



第1図 淨土江遺跡位置図

## II 遺跡の立地と環境

浄土江遺跡は、宮崎市浄土江町108番地に位置しており、南東方位2km余りで大淀川河口に達し、南に大淀川、東に一つ葉入江、さらには日向灘と開けている。この地は、大淀川の氾濫等によって宮崎平野の沖積地が進行して、微高地や自然堤防を形成したところである。遺跡は、現在の広島通りから日豊本線（宮崎駅）を東に横切る形で伸びた自然堤防上に営まれたと思われる。周辺には微高地も多く形成されており、それらには当遺跡と時期を前後する遺跡が分布しており、大町遺跡、別府遺跡、春山遺跡、引土遺跡等は、その代表遺跡である。また、西側には、広島古墳群が存在していたことが知られているが、現在では市街地化され、その形状をとどめていない。しかし、それらの古墳から出土した内行文鏡及び文帝帶銭は宮崎県総合博物館に保存されており、それらの古墳を知るうえでの貴重な資料となっている。なお、この広島古墳群と、住居跡を伴う当遺跡との関連についても興味のもたれどころである。

昭和18年に出土された「宮崎刑務所構内遺構及び遺物に就て」には、当遺跡からの布目平瓦や石塔婆の存在が述べられているが、この地を「浄土江町」と呼ぶことや、この地にゆかりの深い浄土院という寺院が現在、一の宮町に存在することなどの事例によって、当遺跡が往古からの寺院跡であったことが推測される。また、明治18年8月には、この地に宮崎監獄署が建設されて昭和51年6月の宮崎刑務所の移転に至るまで、その任を果し続けてきた。

註 (1)、(2)「特別展、日向の古墳群」図録 宮崎県総合博物館 1979.9

## III 調査の経過と概要

### 第1次調査（昭和52年8月16日～同年8月26日）

A～F区の調査区を設定して調査を進めた。A区では、2本のトレントを組んだが南側寄りの第Iトレントでは、遺物、遺構の確認は出来なかった。扇形運動場の北側に組んだ第IIトレントでは、3基の住居跡を検出したが完全な状態ではなく、それぞれが切り合い状態で確認された。遺物については、土師器の环を主体とし、須恵器片を数点出土するととどまった。B区については、トレントの南側寄りに一部包含層を残しており、粗製の壺形土器を1点出土したのみである。C区、D区は、遺物包含層を確認できず、E区でも攪乱がひどく遺構の検出には苦労したが、この区では2基分の住居跡を検出した。遺物は、土師器の环と須恵器の环を出土している。F区においては、3本のトレントを組んだが北寄りの第IIIトレントにおいて住居跡と多くの遺物包含層をみることができた。遺物には瓶、壺形土器、長胴捷足土器、高环等の当時の生活用具をセットとして出土した。興味深い発見であろう。また、第IIトレントからは、14世紀中葉から後葉期の常滑壺形土器の口縁部を出土ししている。

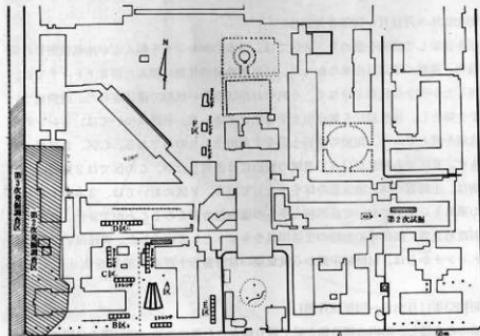
### 第2次調査（昭和53年11月28日～同年12月28日）

この調査は、外壁のみを残し、所内の建造物が砕いて取り除かれた後に当初、10日間の日程で実施することになった。先だって所内数ヶ所に試掘溝を入れて土層の状況を観察したところ、中央部、序舎

北側あたりから東方に寄るにしたがって包含層とみられる黒褐色土層が薄くなることや、その下には黄褐色土層から砂利混入の砂層となっていることから遺構等の残存状態は悪いものと思われた。そこで、所内西南角にあたる西側外堀に沿って南北に2m×20mのトレンチを設定して調査を進めることになった。調査では、上層において建造物等の基礎にあたり掘り下げは難行したが、下部から溝状構（1号溝）及び住居跡（201号）の縁辺部を検出することができた。そこで、調査区の拡張を行ない遺構の検出につとめることになったが当初の調査日程も残り少なくなってきたおり、201号住居跡の完掘さえ危ぶまれる状況となつた。そこで協議の結果、調査日程を1週間延長して引き続調査を行なうことになり、順次調査区域を拡大していった。その結果、新たに2号溝、202号、203号住居跡を検出することができたが人力による掘り下げには限界があり、期間内の完掘は困難と思われた。しかし、遺構はなおも拡大するものと思われ各溝状遺構の延び東側、北側の遺構の存在も懸念された。そこで再度延長を協議し、12月28日まで延長することになった。しかも、再延長時には、重機を導入するとともに調査補助員も増員しての調査となり、北側に約90m、東側に約15mのいわば面的調査となつたが、その結果、南側において201号～204号の4基の住居跡と1号～7号の溝状遺構を検出し、北側では205号～210号の6基の住居跡と8号溝、交叉する9号、10号の溝状遺構を検出している。

#### 第3次調査（昭和54年10月15日～同年11月3日）

第2次調査まで残されていた外壁も取り除かれて一帯は広大な空地となっていた。2次調査区の西方に沿って市道が南北に走っているが、この市道下に公共下水道面渠築造工事が施されることになった。2次調査においては遺構の抜がりが西方に延びることも予測されていたため、それに先だって調査することになったが、その対象が道路下ということもあって水道管、ガス管等の埋設物が多く、その掘削は遺構にまで及んで遺構の残存状況を悪化させていた。しかし、南側部分において301号、



第2図 净土江遺跡発掘調査区位置図

302号、307号の住居跡の一部を検出し、西側断面において、308号、309号の住居跡を確認し得た。また、北側においては2次調査の際に検出した9号、10号の溝状遺構の延長をみた。さらに10号溝に注ぐ南北に延びる11号溝（南北溝）を伴って303

号～306号の住居跡を検出している。

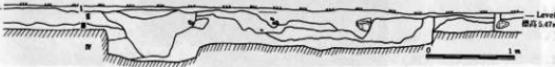
#### IV 第1次発掘調査

##### 1. A-2調査区

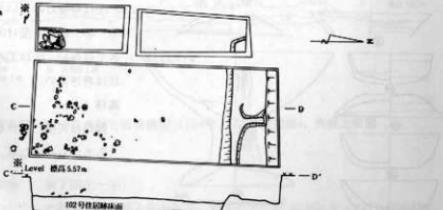
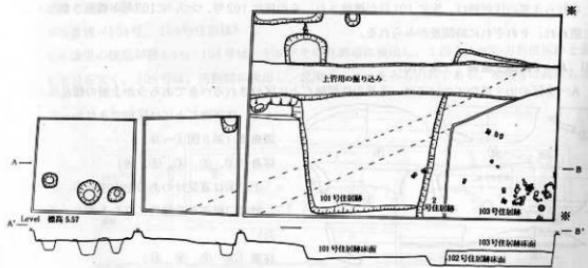
###### (1) A-2区の層位

A-2区は、拘置所の西側の狭い空地にあたるため、いたるところで攪乱を受けており層位の正確さに乏しい点がある。第I層は、表土層であり第II層に暗褐色土層が入り、第III層に茶褐色土層が入る。この層から住居跡の掘り込みを観察することができ、第IV層は黄褐色土層となり、住居跡の床面となっている。下層は小砂利混りの砂層となっている。

###### (2) A-2区の遺構（101号、102号、103号住居跡）



第3図 净土江遺跡A-2区 東壁土層図



第4図 净土江遺跡A-2区遺構図（101号～103号住居跡）

3基の住居跡を検出して  
いる。101号は、北壁と西  
壁の一部と北西隅を残した  
方形状の住居跡である。102  
号は、101号の南半分を切  
り込む形で北壁の一部と北  
東隅を残し、やや南に振った  
略方形を呈する住居跡で  
ある。103号は、102号の  
埋没後に構築されたものと  
思え、床面は浅く壁も残し  
ていない。この住居跡から  
は、かなり集積された状態  
で遺物を出土している。

これら3基の住居跡は、先に101号が構築され、その後に102号、ついで103号が構築されたもの  
と思われ、それぞれに時間差がみられる。

### (3) A-2区出土遺物（第5図）

A-2区の出土遺物については、3基の住居跡ごとに区分されるべきであろうが上層の擾乱等もあ  
って、住居跡ごとにには区別できなかった。

#### 須恵器（第5図①～⑩）

#### 环身（①、②、④、⑧、⑨）

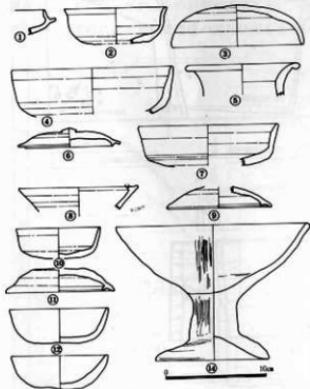
①、⑥は蓋受けのあるものである。②、④  
⑨は口縁部が直線的に立ちあがり、端部は  
丸い。

#### 环蓋（③、⑤、⑦、⑩）

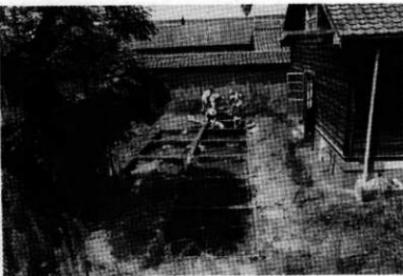
③は身受けのないもので口縁部は外に反る  
⑤、⑦、⑩は身受けの立ちあがりをもつた頸  
者ではない。⑥は尖り状のツマミを有するが  
⑪は有さない。

#### 高环（⑪）

脚部は欠損している。口縁部は直線的に立  
ちあがり薄くなる。端部は丸い。



第5図 A区出土土器実測図



図版1 浄土江跡A-2区調査状況

### 壺形土器（⑪）

口縁部は外反気味に開き、端部は  
丸く反り返る。頸部から胸部を欠損  
している。

#### 土器器（⑫、⑬）

⑫⑬は口縁部が直線的に立ちあが  
り、薄くなる。⑬は底部から口縁部  
にかけてゆるやかに立ちあがり肥厚  
し、底部にヘラ記号をもつ。

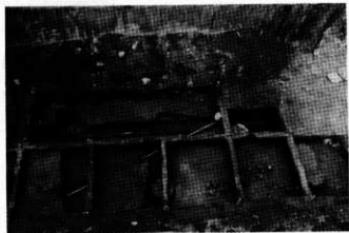
#### 高环（⑭）

环は体部から口縁部にかけて、や  
や内湾気味に開く端部は丸い。脚は  
基部が円柱状を呈し、裾部が大きく  
開く。端部は丸い。

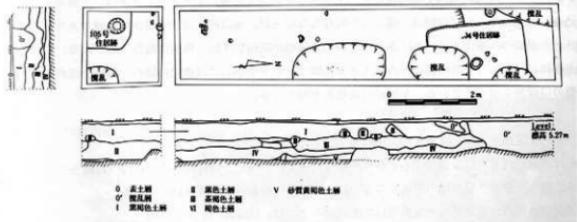
### 2. E区（第6図）

#### E区の遺構（104号、105号住居跡）

E区も後世の擾乱が著しい。104号は、トレンチの北側端に検出し、1辺2.2mの方形住居跡と思  
われ東半分を欠く、105号は、南側端に検出し、北東コーナーをみるとみである。規模等は確認しえ  
ない。



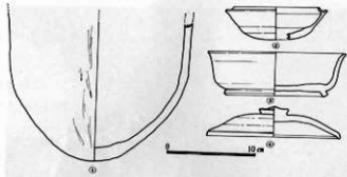
図版2 A-2区住居跡



第6図 浄土江遺跡E区遺構図（104号、105号住居跡）、西壁土層図

### 3. B・C・E区出土遺物（第7図①～④）

①はB区の東側断面に出土した粗製壺形土器と思われる。胸部が膨らみ、底部に至っては丸底をなす。  
成形は輪積によるものと考え、調整は縱方向へのヘラ削りによる。胎土に石粒を含み赤褐色を呈する。



第7図 B区、C区、E区出土土器実測図

③はC-2区より出土した須恵器环身である。立ちあがりは内傾し短い。受部は短く外方に開く、底部は肥厚し、平坦、横ナデ調整、焼成は良好で青灰色を呈する。

④はE区の住居跡より出土した須恵器环身で高台をもつ。口縁部はやや反味で直線的に立ちあがる。底部は巻あげによる。横ナデ調整、焼成悪く白灰色を呈する。

④はE区出土の土師器环蓋である。天井部にボタン状のツマミを有し、天井部から口縁部にかけてゆるやかに接を成す。口縁部にわずかの内反りをみる。ヘラ削り調整、焼成良好、赤褐色を呈する。

かけてゆるやかに接を成す。口縁部にわずかの内反りをみる。ヘラ削り調整、焼成良好、赤褐色を呈する。

#### 4. F区（1～3トレンチ）

##### （1）F区の層位（第9図）

F区は、中央庁舎の西空地に設定した1～3トレンチである。I・2トレンチは、上層からの掘込み、推乱が深く良好な層は一部にしか残存しなかった。層位的には、I層が擾乱層であり、コンクリート基礎等が露出する。II層が黒色土層で、III層が黒褐色土層、IV層に褐色土層が入る。この層の上面においてピット等の露頭をみるとともに第3トレンチからは14世紀中葉から後葉と思われる常滑窯の口縁部を出土している。V層には黄褐色土層が入る。

##### （2）F-1区出土遺物（第8図 ①～④）

①は須恵器环蓋で口縁部の立ちあがりが短く、身受けが浅い。口縁部から天井部へは接をもち肥厚する。横ナデ調整で自然輪の付着を見る。胎土に小砂粒を含み、焼成は良好である。

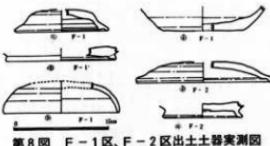
②は貼り付けの高台をもつ須恵器环で底部のみであり、体部については不明

③は須恵器环蓋で身受けがなく、天井部から口縁部にかけて内湾する。天井部ヘラ削りで口縁部は横ナデである。胎土に小砂粒を含み、焼成は良好で淡青灰色を呈する。

④は須恵器环の底部で、ヘラ切り離しの後ナデ調整。焼成は良好で淡黒灰色を呈する。

##### （3）F-2区出土遺物

⑤は須恵器环蓋で天井部は浅く平坦である。口縁部でわずかに外反し、端部で立ち、内側に接をも



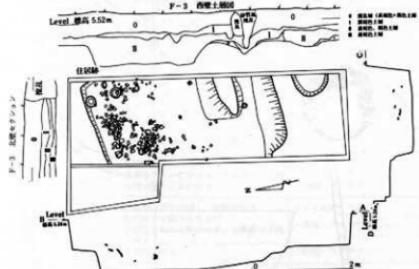
第8図 F-1区、F-2区出土土器実測図

つ、焼成は悪く、灰褐色を呈する。

⑥は貼り付けの高台をもつ須恵器环で焼成は良好、青灰色を呈する。

##### （4）F-3区の遺構（106号住居跡）（第9図）

F-3区においては106号住居跡を検出しているが周辺部は建造物の基礎等によってかなり掘削を受けており、一部を確認するにとどまった。住居跡は、北壁の一部と北東部隅を残すにすぎず、褐色土層から振り込まれて壁高は40cmを計る。北壁から北東部隅より南側



第9図 清水江遺跡F-3区遺構図（106号住居跡）、土層図

は、プランを良く残しており、瓶が押しつぶされた状態を中心にならに遺物が集積していた。また、南壁については上部からの振り込みによってかなり乱されてはいるものの推定線は出せる。それによると住居跡の構造は、I辺がほぼ3.5mの方形形状を呈すると考えられる。また、ピットが北東隅に寄って北壁側に1個と、平行に離れて1個検出されているが、この住居跡に伴うものであるか否かは判断しない状況にある。

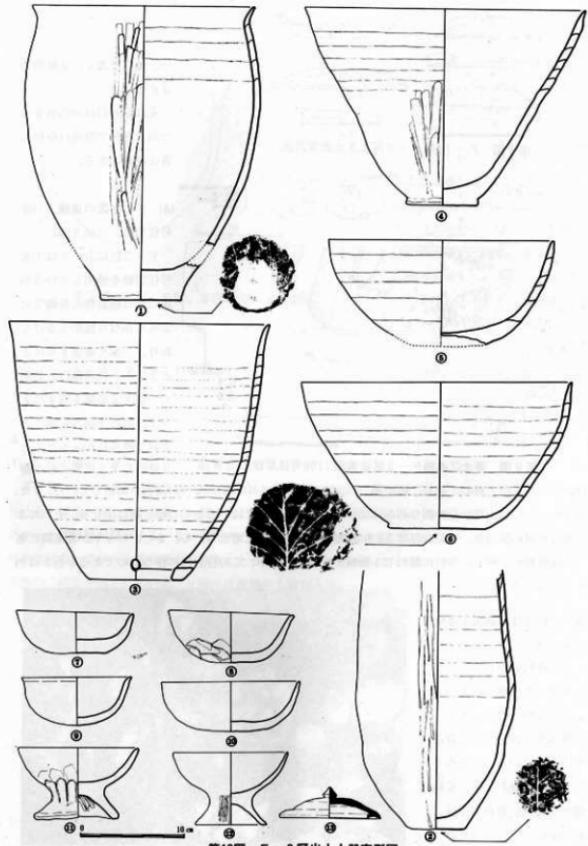
##### （5）106号住居跡出土遺物

###### （第10図）

この住居跡からは、土器が集積した状態で出土しており、器種も豊富である。土師器を主体として須恵器も出土しているが土師器では、大型の壺形土器、長胴壺形土器、瓶、数種の深鉢、壺、高杯が出土し、須恵器では、环等が出土している。



図版3 F-3区遺物出土状態



第10図 F-3区出土土器実測図

第1表 F-3区出土遺物観察表

番号	器種	法 種 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
1	甕	口径 21.5 底径 20.5 高さ 22.7 木重底 28.5	・口縁がわずかに縮り、口縁部は外反する。 ・底部はやや内凹かららみ、端部へぼりまと ・底部は低い平底を成す ・木重底である	ワツリ成形 ・外面 口縁部ヨコナデ 脊部ヘラナデ ・内面 ヨコナデ	焼成 良好 色調 淡黄褐色 胎土 砂粒多し
2	甕	口径 25.0 底径 13.5 高さ 15.3	・口縁部端縁を仄く ・底部はやや内凹で直線的 ・底部は内凹かららみにより薄い平底を成す ・木重底である	ワツリ成形 ・外面 タテのヘラナデ ・内面 ヨコナデ	焼成 やや軟質 色調 淡黄褐色 胎土 砂粒多く含む
3	瓶	口径 25.0 通部径 6.6 高さ 25.0	・口縁部はわずかに外反し、端部は尖る ・底手は尖り ・やや内凹して底部へいたる ・通部に斜時に穿孔して穿孔するをみる	ワツリ成形 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ ・通部 ナダ調整	焼成 良好 色調 黄褐色 胎土 石粉を含む
4	深 鉢	口径 27.0 通部径 19.0 高さ 19.0	・口縁部から口縁部にかけては直線的にひら かり、端部は尖る ・底部は内凹でやや底らみをもつ ・底部は低い平底を成す ・木重底である	ワツリ成形 ・外面 脊部から底部ヨコナデ 脊部から底部タテのヘラナデ ・内面 ヨコナデ	焼成 良好 色調 淡色 胎土 石粒を多量に含む
5	鉢	口径 21.5 通部径 10.2 高さ 10.2	・底部から口縁部にかけては直線的にひら かり、端部は尖る ・やや内凹の丸底である ・底部はやや底らみをもつ ・底部へぼりと底厚せし、不整な形平底 を成す ・木重底である	ワツリ成形 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ	焼成 やや軟質 色調 淡褐色 胎土 砂粒多し
6	深 鉢	口径 26.1 通部径 14.2 高さ 14.2	・口縁部はやや内凹し、端部は尖る ・底部はやや底らみをもつ ・底部へぼりと底厚せし、不整な形平底 を成す ・木重底である	ワツリ成形 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ	焼成 良好 色調 茶褐色 胎土 砂粒を含む
7	土 器	口径 11.2 通部径 3.9 高さ 3.9	・口縁部は短く、やや外反し端部は丸い ・底部は常に底厚く、全体的に厚みのある 丸底である	手づくね成形 ・外面 (C) 口縁部 ヨコナデ ・外面 (C) 口縁部 ヘラ削り ・内面 (C) 口縁部 ヨコナデ ・内面 (C) 口縁部 ヘラ削り	焼成 やや軟質 色調 高褐色 胎土 粘土、砂粒を含む
8	土 器	口径 12.1 通部径 4.9 高さ 4.9	・口縁部は開き端縁にたちあがり、端部に おいて仄く立ちある ・底部は内凹でへぼりにより不整形を成す	ロクロ成形 ・外面 (C) 口縁部 ヨコナデ ・外面 (C) 口縁部 ヘラ削り ・内面 (C) 口縁部 ヨコナデ ・内面 (C) 口縁部 ハラ目	焼成 良好 色調 淡褐色 胎土 粘土
9	土 器	口径 10.6 通部径 4.7 高さ 4.7	・口縁部は内凸端縁にたちあがり、端部は わざわざ外反する ・全体的に底厚で成形されている	手づくね成形 ・外面 (C) 口縁部 ヨコナデ ・外面 (C) 口縁部 ヘラ削り ・内面 (C) 口縁部 ヨコナデ ・内面 (C) 口縁部 ハラ目	焼成 良好 色調 淡褐色 胎土 粘土、砂粒を含む
10	土 器	口径 13.4 通部径 4.8 高さ 4.8	・口縁部はやや内凹端縁に大きく開き、端 部は尖る ・底部は少々、肥厚する ・木重底である	手づくね成形 ・外面 (C) 口縁部 ヨコナデ ・外面 (C) 口縁部 ヘラ削り ・内面 (C) 口縁部 ヨコナデ ・内面 (C) 口縁部 ハラ目	焼成 良好 色調 淡褐色 胎土 粘土、砂粒を少量含む
11	高 士 器	口径 11.6 通部径 8.3 高さ 8.3 環部径 8.3 底径 3.4 高さ 3.4	・口縁部はやや内凸端縁で、端部は丸 い ・底部は底厚く、長めの基盤をもつ ・環部を作りてある	手づくね成形 ・外面 (C) 口縁部 ヨコナデ ・外面 (C) 口縁部 ヘラ削り ・内面 (C) 口縁部 ヨコナデ ・内面 (C) 口縁部 ハラ目	焼成 良好 色調 茶褐色 胎土 砂粒を多量に含む
12	高 士 器	口径 11.0 通部径 6.9 高さ 6.9 環部径 6.9 底径 3.1 高さ 3.1	・口縁部はやや内凸端縁に開き端縁は尖る ・底部は細く、長めの基盤をもつ ・木重底である	环部 ・外面 ヨコナデ ・内面 ヨコナデ 環部 ・外面 ヘラ削り ・内面 ヘラ削り	焼成 良好 色調 淡褐色 胎土 少量の砂粒含む
13	环 器	口径 9.8 通部径 1.9 高さ 1.9 天井部 底径 1.9 高さ 1.9	・半受け口部より、ちあがりの低いもので ある ・天井部 端縁部ヨコナデ ・口縁部 ヨコナデ ・内面 ナダ	ヨコナデ ・天井部 回転タテ ・口縁部 ヨコナデ ・内面 ナダ	焼成 良好 色調 淡褐色 胎土 壁、内側に砂粒を含む

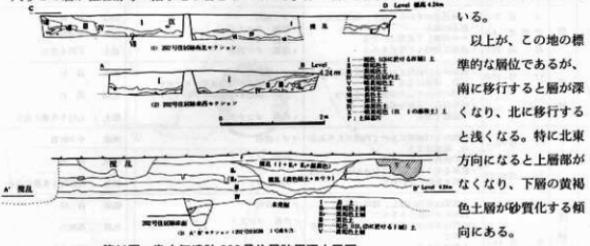
## V 第2次発掘調査

### 浄土江遺跡202号住居跡実測図

#### 1. 層位 (第11図)

202号住居跡の中央部を東西に切った状態で層位を観察した。この地点でも上部からの擾乱が多い、幸いにして遺構が深いため、それらへの損傷は少ないようであった。

第Ⅰ層は、表土層が約20cmあり、第Ⅱ層に黒褐色土層が30cm入る。この層は、漸移層の暗褐色土層とに分けることができる。第Ⅲ層に黒色土層が20cmの厚さで帯状に入る。第Ⅳ層に褐色土層が約20cm入りこの層が住居跡等の掘り込み層となっている。第V層に黄褐色土層が入り住居跡の床面となって



第11図 浄土江遺跡202号住居跡周辺土層図

#### 2. 住居跡と出土遺物 (201号～202号住居跡)

##### 201号住居跡 (第12図)

###### 位 庫

外壁の南西隅から西外壁に沿って約12m北に寄った東側に位置している。この住居跡は、無傷であり、2次調査の期間延長と調査区拡大をもたらす端緒となったが調査の結果、201号には4基の住居跡が近接し、南部集落を形成していた。

###### 構 造

形状は、南西隅部に南北0.6m、東西1.3mの作り出しをもつ方形状を呈する。

規 模 北辺長4.9m、南辺長4.1m+1.3m、東辺長4.6m、西辺長3.5m+0.6mである。

主軸の方位 N-3°-W。

住居跡の床面は、二重に築き固められた形跡をみる。



図版4 浄土江遺跡第2次発掘調査全景

**炉跡** 中央部に位置し、底部を欠いた壺形土器が据えられており、周囲に灰や焼土をみるとることができる。

**柱穴** 炉跡を中心に北東隅と南西隅の対角線上に2個検出しており、床面から30cm掘り込まれている。

**壁** 良く残されており、壁高は45cmを計る。

#### 出土遺物 (第13図)

##### 土師器 (第13図①、②、③、④)

**壺形土器** (①) 底部を欠き、炉跡に据えられた状態で出土した。口縁部は、短く直線的に「く」字形に外反し、胴部がやや脹らみをもち長胴形を呈する。口縁部は、内外面ともヨコナデ調整を施し、外面胴部は粗い擦痕が残り、胴下部に炭化物が付着している。内面は粗いヨコナデであり胴下部に炭化物が付着している。胎土に石砂粒を多量に含み、焼成はやや軟質で黄褐色。

**高環** (②、③、④) ②は環部の底部に脚部との接合のためハサを作り出している。いずれも脚部は薄く裾ひろがりになる傾向がみられる。

##### 須恵器 (第13図⑤、⑥、⑦、⑧)

**坏身** (⑤) 口縁部の立ちあがりは短く、端部は尖る。受け部は小さく内側に折り曲げている。底部は、ヘラ切り離しであり、口縁部はヨコナデ調整を施している。



第12図 201号住居跡実測図——同炉跡実測図

部は、ヘラ切り離しであり、口縁部はヨコナデ調整を施している。

⑥、⑦、⑧は、大型の壺形土器の胴部である。⑥は、外面は横目タキに一部縦位のタキを加えたものと思われ、内面は同心円文タキである。⑦、⑧は、外面を格子目タキ、内面を青海波文タキで調整している。何れも外面には自然軸の付着をみる。



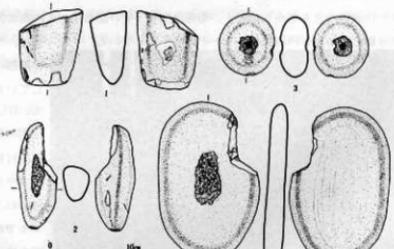
図版5 201号、204号住居跡



第13図 201号住居跡出土土器実測図

している。

石質は砂岩。



第14図 201号住居跡出土石器実測図

### 石 器 (第14図①、②、③、④)

石斧 (①) 大型の摩製斧で基部を欠いている。刃部は、両刃で剥離面がみられる。断面は凸レンズ状を呈する。石質は石英斑岩。

敲き石 (②) 石棒的な敲き石で基部の片半分が割れている。先端部が尖り、顯著な敲打痕をみるとができる。石質は灰色砂岩。

鑿み石 (③) やや扁平な丸石の両面に直径 2cm、深さ 0.5cm の鑿みをもつものである。鑿みは、先端の鋭利な物で突いてあけたものと思われる。周間に打痕はみられない。石質は砂岩。

石皿 (④) 扁平な円盤を使用したもので一部を欠いている。両面ともに顯著な使用痕をみるとができる。1面は、磨石の台として使用されたものと思われる表面がやや産みがちになって磨滅している。裏面は、敲き石台として使用されたものと思われる、中央部に粗い敲打痕を残

### 第 202 号住居跡 (第15図)

#### 位 置

201号住居跡から2号溝を挟んで3.5m 北側に離れて発見され、南部集落に属する。住居跡西半は、刑務所当時の外壁が残り調査不能のため確認されなかった。東辺は、203号住居跡と切り合っている。

#### 構 造

形状 住居跡西半分が未確認であるが方形形状を呈するものと思われる。

規模 西辺と北辺は不明であるが南辺長 5.0m、東辺は 203号住居跡で切られているが 6.6m を計る。

主軸の方位 N-12° -W

炉跡 中央部より、やや南東の方位に位置し1面に焼土をみると。

柱穴 検出されなかった。

床・壁 住居跡は褐色土層を上面にして、黄褐色土層を掘り込んでいる。現存壁は顯著であり、壁高は 35cm を計る。

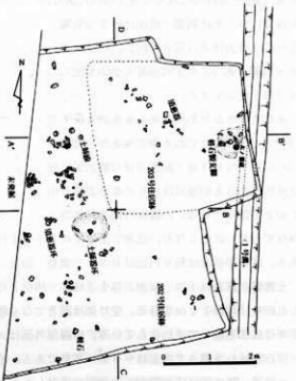
#### 出 土 遺 物 (第16図①～⑥)

住居跡床面からは土器類、須恵器が破碎された状況で出土している。

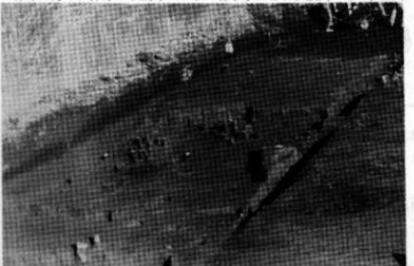
須恵器 瓶身 ①は立ちあがりが長く 1.8cm を計り、やや内縮する。端部はやや肥厚し、先端内側に小さい凹みを有する。受け部は立ちあがりとの境に沈線をめぐらし、張り出しが立ち気味である。口縁部は薄く、体部から底部にかけて若干厚みをます傾向にある。底部は薄くなる。口縁部はヨコナ

デ調整で外面、体底部は磨滅しており不明。内面はヨコナデ調整である。胎土は密で焼成良好、外表面は白灰色、内面は青灰色を呈する。

②は立ちあがりが①よりも低く 1.6cm を計る。立ちあがり端部は退化した凹みをもち肥厚しない。受け部は立ちあがりとの境の沈線も退化し、張り出しが水平化



第15図 202号、203号住居跡実測図



図版 6 202号、203号住居跡

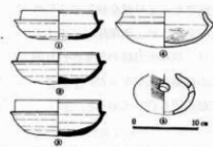
する。器厚も全体的に厚みを増す傾向にある。

口縁部はヨコナデ調整で底部にヘラ切り離しをみる。外面体部は器面が粗い。内面はヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含み焼成は良好で青灰色を呈する。

④は立ちあがりが長く 2.1 cm を計る。形態は③と同じようであるが立ちあがり端部の凹みが浅くなりさほど顯著ではない。受け部は立ちあがりとの境に比線をめぐらし割り出しが立ち気味である。口縁部は薄く、体部にかけてだいに厚くなり、底部に至っては若干薄くなる。口縁部はヨコナデ調整で底部はヘラ削りである。体部の器面は粗く内面はヨコナデ調整。胎土に砂粒を含み焼成は良好。青灰色を呈する。

土師器 环身 ④は、須恵器環を土師器で模倣したものである。口径 12.3 cm、器高 5.5 cm で立ちあがりは内傾し 2 cm を計る。受け部は頸部ではなく腰を成すのみである。体部は内済して底部に至る。器厚は底部を除いて平均化している。口縁部外面はヨコナデ調整で体部はヘラ削りである。立ちあがり部内部はヘラ磨きで内面はヘラナデ調整である。胎土は密で焼成良好。淡赤褐色を呈する。

土師器 頸 ⑥は須恵器縁を土師器で模倣したものであり、頸部を欠く。頸部は最大径 9.5 cm を計る。肩部にゆるやかな棱をもち、この部分に径 1.1 cm の穿孔をもつ。穿孔は成形後に外面から穿たれたもので内面に盛りあがりをみる。外面は横方向のヘラ磨きである。胎土に少量の砂粒を含み焼成は良好で淡黄褐色を呈する。



第16図 202号住居跡出土土器実測図

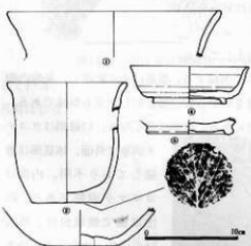
第17図 203号住居跡出土土器実測図 (第15図)  
位 置  
202号住居跡の東辺を切り、住居跡の西半を共にする形で発見され南部集落に属する。東辺は南北に延びる第1号溝状遺構をもっている。

構 造  
形 状 住居跡東半を検出するのみであるが、おそらく方形状を成るものと思われる。  
規 模 東辺長 2.9 m を計るのみであり、かなり小形な住居跡である。

主軸方位 N - 2° W

■ 東壁中央部に接して附設されていたものと思われる。幅 60 cm、長さ 60 cm に粘質の燒土をみるとができる。竪本体は崩れており、その形状は不明であるが中央部に多角柱状に削られた軽石製の支脚を検出している。

柱穴 検出することができなかった。



- 16 -

床・壁 床面については、202号住居跡の床面と明確に区別することはできなかった。壁は、南壁、東壁、北壁ともに一部を残すのみであり全部はつぶれていった。

出土遺物 (第17図①～⑤) (第18図④～⑧)  
①～④

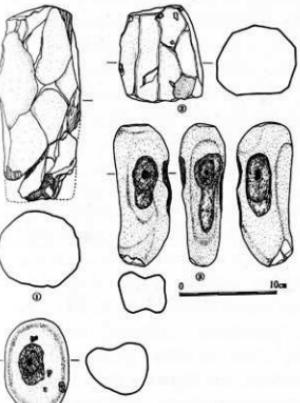
遺物の出土は散逸的であるが竪本から木葉底の小型の深鉢が出土している。

土師器 (第17図①、②、③)

鑿形土器 ①は口縁部であり端部は丸くなる。外面、内面ともヨコナデ調整であり外面は黒く煤が付着している。胎土に石粒を含み焼成は良好で黄褐色を呈する。

鉢形土器 ②は小型の鉢形土器でワツミ成形をなす。口縁部はやや外反し副脚は直線的で脛らみをもたない。底部で若干そぼり、厚い平底をなす。底部は木葉底である。外面は風化剝離を受け調整痕は不明である。内面はヨコナデ調整であり胎土に多量の砂粒を含み、焼成は悪く暗黒褐色を呈する。

淺鉢 ③は浅鉢の底部と思われる。底部



第18図 203号住居跡出土遺物実測図

は平底で両凸しながら体部に立ちあがる。外面はヘラナデ調整で内面はヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含み焼成は良好で赤褐色を呈する。

須恵器 (第17図④、⑤) ④、⑤は高台付の环である。④は体部が直線的に立ちあがり、口縁部でわずかに外反し、端部は尖る。体部は内外ともにヨコナデ調整である。体部から付高台まではヘラ削りである。胎土は密で焼成も良く黒灰色を呈する。⑤は底部片で焼成が悪く風化が著しい。

経石製支脚 (第18図①、②)

竪内より大小 2 個の支脚を出土している。①は直径 8.4 cm、長さ 20.2 cm で側面に面取りの成されたものである。②は径 8.4 cm、長さ 9.8 cm、端部両面は平坦で側面は多角柱に面取りが成されている。これらは、竪の支脚として使用されたものであろう。

石 器 (③、④)

裁き石 (③) 石棒状の裁き石で両端に顯著な裁き痕をみることができる。また、体部中央には 3 面に楔円形状の人工的な凹みをもっている。石質は砂岩。

溝み石 (④) 厚みをもつ楔円形状の溝み石であり、片面に溝みをもつ。表面には加熱を受けた状態がみられる。石質は砂岩。

第204号住居跡 (第19図)

位 置

- 17 -

201号住居跡から東に5m離れて発見され、南部集落に属する。1号溝が東に直角状に折れて7号溝となり、204号住居跡を横切る。また、南西限寄りを北西に延びる5号溝によっても切られている。東部に一部後世の掘り込みをみる。

#### 構造

形状 方形状を呈し、隈はやや丸い

規模 北辺長 4.2m、南辺長 4.75

m、東辺長 4.15m、西辺長

3.95m

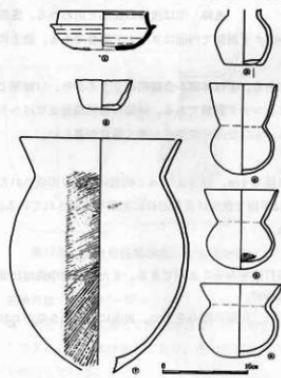
主軸方位 N - 6° - E

炉跡・柱穴 検出できなかった。

床・壁 床は平坦で、あまり起伏はみられない。壁はやや内傾しており、西壁で壁高40cmを計る。

#### 出土遺物（第20図①～⑥）

完形品に近い遺物が多く出土している。特に小型土師器壇の出土は注目すべきものであった。



第20図 204号住居跡出土土器実測図



第19図 204号住居跡実測図

部を欠く。頸部から肩部にかけてやや脛らみをもち、胴部から底部へは直線である。底部は貼り付けで平底を成す。頸部径 3.8cm、胴部最大径 6.7cm を計る。

④は南北隅寄りに出土している。口縁部は長く、内湾気味に立ちあがり、あまり開かない。頸部は締り、胴部中央が少し脛らむ球形状を呈する。口径 8cm、頸部径 5.3cm、胴部最大径 7.5cm、器高 10.7cm を計る。表面は磨滅しており調整等は判断し難いが、刷毛目調整のように思える。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好で赤濃褐色を呈する。

⑤は北壁寄りに中央部に出土し、口縁部の一部を欠いている。口縁部は長く直線的に立ちあがり、④より開き気味である。頸部は締り、胴部中央が脛らむ球形状を呈する。頸部径 5.5cm、胴部最大径 8cm、器高 9.4cm を計る。口縁部はヨコナデ調整で胴部にはヘラ磨きがみられる。内面はヨコナデ調整。胎土に多くの砂粒を含み、焼成は良好で黄褐色を呈する。

⑥は南壁の東寄りに出土している。口縁部は短く内湾気味に外反する。頸部は締り、胴部はあまり脛らまない球形状を呈し、底部がやや平坦となる。口径 9.5cm、頸部 7cm、胴部最大径 9.2cm、器高 8.7cm を計る。口縁部は内外面ともにヨコナデ調整で胴部外面はヘラ削り調整である。底部は粗いヘラ削りがみられる。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

土師器 豊形土器 ⑦ 東壁中央部より少し内側部分から出土している。口縁部は「く」字形に外反し端部は丸い。頸部は締り、胴部の中央部で最も脛らみ、底部へとしだいにすぼまる。底部は尖底を成すものと思われる。輪積み成形と思われ、口縁部はヨコナデ調整で上半胴部は平行タキ、下半胴部から底部へは斜行タキで調整している。内面は刷毛目調整、胎土は多くの石砂粒を含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

#### 第205号住居跡（第21図）

##### 位置

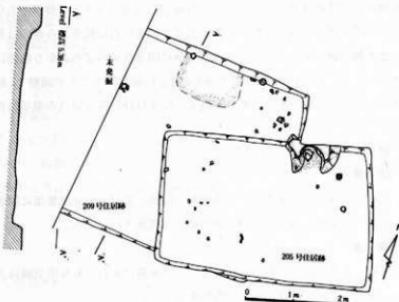
南部集落の202号住居跡の北端から約54m北の方向に平行移動した位置に発見された。この位置には209号までの5基が北部集落を形成しており、205号は209号の東半部を切っている。

##### 構造

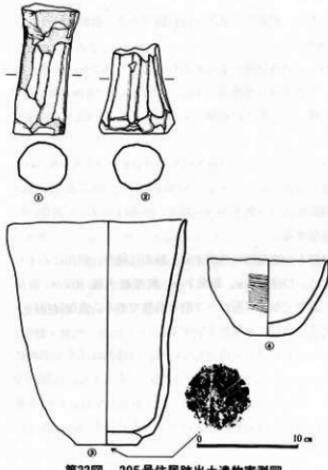
形状 北辺、南辺が長い長方形状を呈する。

規模 北辺長 4.5m、南辺長 3.0m、西辺長 2.7m

主軸方位 N - 9° - W



第21図 205号、209号住居跡実測図



第22図 205号住居跡出土遺物実測図

外湾する側面をもって重ねていている。底部は小さい平底となる。口径 17.6 cm、器高 22.5 cm を計る。輪積成形で底部は貼り付けによる。口縁部と内面はヨコナデ調整であり、胴部外面は綫方向のヘラナダ。底部に至ってはヘラ削り調整である。胎土に石砂粒を含み焼成は普通で赤褐色を呈する。

**土師器 瓶(④)** 口縁部は内湾気味に開きながら立ちあがり端部は尖る。底部は丸味をおびた平底を呈する。口径 12 cm、器高 7.6 cm を計る。口縁部はヨコナデ調整で、胴部外面は粗いヘラ磨きである。内面はヨコナデと一部ヘラ磨きを施す。胎土は砂粒を少量含み焼成は良好。濃赤褐色を呈する。

#### 第 206 号住居跡 (第23図)

##### 位 置

205号住居跡から北東方向に 3 m 離れた位置に発見され北部集落に属する。西北は 207号住居跡に接している。東側に南北に延びる溝を切って構築されている。

##### 構 造

形状 東西に長い、長方形状を呈し、北東隅は崩れており南東隅は大きなカーブを成している。また、東壁寄りに円形状の後世の掘削を受けている。

規模 北壁と東壁は崩れています。北辺長約 4 m、南辺 4.1 m、東辺長約 3.2 m、西辺長 3.3 m。

**竪** 北壁東側部分に接して附設されている。粘質土を固めて作られており一部袖を見ることができる。煙道は不明である。軽石製の支脚 2 本を出土している。

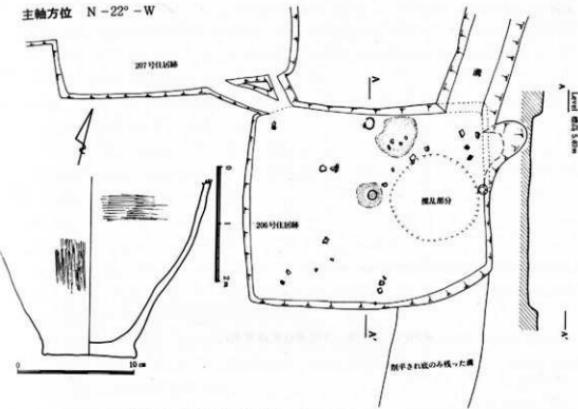
**床・壁** 床は、平坦であり黄褐色砂質土層を上面にしている。壁は、やや外傾しており良く残されている。壁高は 30 cm を計る。

##### 出 土 遺 物 (第22図①, ③, ④, ⑤)

竪から軽石製支脚を出土し、東壁寄りに土師器壺、竪近くに木葉底の變形土器を出土している。

**軽石製支脚 (①, ②)** ①は直径 4.8 cm、長さ 12.5 cm を計り両端が広がり平担を成す。側面は多角柱状に面取りが成されている。②は端部が折れたもので折れ口の直径は 4.5 cm、基部は 7.5 cm を計る。側面は多角柱状に面取りが成されている。

**土師器 變形土器 (③)** 木葉底の變形土器である口縁部は直行して開き、端部に至って少し外反する。胴部は内湾する側面



第23図 206号住居跡実測図 (206号住居跡出土土器実測図)

**炉跡** 焼土が住居跡中央部と北壁に接した中央部とに検出されている。このため炉跡は 2ヶ所あったものと思われるが、中央部の炉跡に變形土器が据えられており、これが主体の炉跡と考えられる。

**床・壁** この住居跡は黄褐色砂層を振り込んでおり、床面は南傾斜である。壁は外傾しており、砂質土層のため残りは良くない。壁高は 22 cm を計る。

##### 出 土 遺 物 (第23図)

床面遺物は破片が散逸的であり、まとまったものは出土しなかった。

**土師器 變形土器 (第23図)** 中央部炉跡に据えられていたもので口縁部を欠いている。胴部がやや脹らみをもち、ゆるやかに底部へとすぼまり、厚い平底となる。底部には中央を横断する沈線が 1 本施されている。底部は貼り付けであり、輪積み成形である。外面は綫方向のヘラ削りであり、内面はヨコナデ調整である。胎土は石粒を多く含み、焼成は普通。黄褐色を呈する。

#### 第 207 号住居跡 (第24図)

##### 位 置

206号住居跡の北西に近接して発見され、北部集落に属する。住居跡西半は 208号住居跡を切っている。

##### 構 造

形状 208号住居跡を切る北東部は明確でないが方形状を呈するものと思われる。

規模 北辺長約4m、南辺長4m、東辺長3.2m、西辺長約3.3m



第24図 207号、208号住居跡実測図

主軸方位 N-19°-W

炉跡 検出されず。

床・壁 床面は208号住居跡の床面より高く検出されており平坦である。壁は上部が削除を受けているため不明である。現壁高は18cmを計る。

出土 遺 物 床面から土師器片が出土したのみで復元可能なものはなかった。

208号住居跡 (第24図)

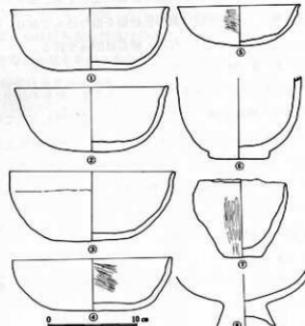
位置

北部集落に属し、207号住居跡によつて東半部を切られている。また、南方に205号、209号住居跡が近接している。

構造

形状 207号住居跡によって東半部を切られているが方形状を呈するものと思われる。

規模 北辺長4.7m、南辺長・東辺長は計測不能、西辺長4.2m。



第25図 208号住居跡出土土器実測図

主軸方位 N-5°-W

炉跡及び竈 住居跡中央部に焼土を検出し、その中央に深鉢形土器が掘えられていた。竈は北壁中央部に附設されていたと思われ、焼土や竈に使用された粘質土及び輕石製の支脚と思われるものがみられた。かなり壊れた状態でもあり形状は不明である。

床・壁 床面は207号住居跡より若干低い位置にあり平坦であった。壁は東壁と南壁の一部を残すが、北壁は溝状構造等によって不明であった。

出 土 遺 物 (第25図①、②、③、④、⑤、⑥、⑦、⑧)

出土遺物は土師器を主体としており、須恵器片が数点含まれるのみである。特に土師器、浅鉢形土器が4点出土したことは注目すべきである。

土師器

浅鉢～(丸鉢)～(①、②、③、④)

①は中央部炉跡より出土した。口径17.8cm、器高6.9cm、口縁部はわずかに外反し、体部は湾曲しながら立ちあがる。底部は平坦であり口縁部内外面はヨコナデ調整、体部はヘラ削り調整である。胎土は密で砂粒を含み、焼成は良好で暗赤褐色を呈する。

②は北東隅より出土した。口径17.3cm、器高7.3cm、口縁部は直行気味で体部は湾曲しながら立ちあがる。底部は平坦で器高を増す。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部は不明である。胎土は密で砂粒を含む。焼成は良好で赤褐色を呈する。

③は、④の背面に近接して出土している。口径18.6cm、器高8cm、口縁部は外反気味で器厚が薄くなる。体部は内湾しながら立ちあがる。底部は平坦でさほど厚くはない。口縁部はヨコナデ調整で体部は擦痕が残り、全面に煤の付着をみる。内面はヘラ磨きがみられる。胎土は密で砂粒を含み焼成は普通で茶褐色を呈する。

④は竈の南東に近接して出土した。口径17.9cm、器高5.8cm、口縁部は直行し、体部は内湾気味に立ちあがる。底部は平坦でわずかに器厚を増し、ヘラ記号をもつ。口縁部は指頭つまみによる横引きがみられる。体部はヘラ削りで内面はヘラ磨き調整である。胎土は密で砂粒を少量含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

環(⑤) 北東隅に出土している。口径13.8cm、器高4.5cm、口縁部は指頭つまみ横引きの反りがみられる。体部は内湾気味に開きながら立ちあがる。底部は丸味をおびている。口縁部はヨコナデ調整で体部はヘラ磨き。底部はヘラ切りがみられる。内面はヨコナデ、ヘラ磨きである。胎土は密で砂粒を少量含み焼成は良好で赤褐色を呈する。

深鉢(⑥) 中央部に竈に掘えられていた。口縁部と胴部の一部を欠く。胴部は脛をもたない円筒状をなし、底部は円盤状の底平を成し木葉底である。胴部外面は調整不明、底部にかけてはヘラ削りである。内面はヨコナデ調整。胎土に石砂粒を含み焼成は不良で暗赤褐色を呈する。

塙(⑦) 竈の近くに出土している。口径9.8cm、器高8.8cm、口縁は内傾し端部は尖る。体部は直線的に開きながら立ちあがる。底部は小さい平底を呈する。輪積み成形であり、口縁部は指頭つまみによって粗く成形されている。外面はヘラ削りで内面はヨコナデ調整である。胎土に砂粒を含み、焼成はやや軟質で灰褐色を呈する。

**盤** (⑧) 西壁寄りに出土している。高台付きの盤であり、盤部は口縁部と体部の一部を欠く。盤底部は丸味を帯びており体部から口縁部にかけては内湾気味に立ちあがるものと思われる。高台部は小さく高いもので、据ひろがりとなっている。高台据部は指頭つまりによって成形されている。胎土盤全体部はヘラ削りであり、内面はヘラ研磨である。高台内面は指頭によるナデが施されている。胎土に微細砂粒を混入し、焼成は良好。黄褐色を呈する。

#### 第209号住居跡（第21図）

##### 位置

北部集落に属し 205号住居跡によって南東半部を切られている。北に 208号住居跡が近接している。

西辺は刑務所当時の外壁が残り調査不能のため未確認である。

##### 構造

形状 東辺は切られ、西辺は未確認であるが北東隅の状況からは方形状を呈するものと思われる。

規模 1辺が 4.2m 内外を示すものと思われる。

主軸方位 N - 7° - E

電 北壁中央部に幅 1.5m、長さ 80cm の焼土分布をみると、この位置に竈が築かれていたものと思われるが既に崩れしており規模は不明である。

床・壁 床面は平坦でやや南に傾斜している。壁は残存部分が少ないが、外傾がみられる。壁高は 20cm を計る。

#### 出土遺物（第26図①～⑥）

遺物は主に北壁に寄って出土している。

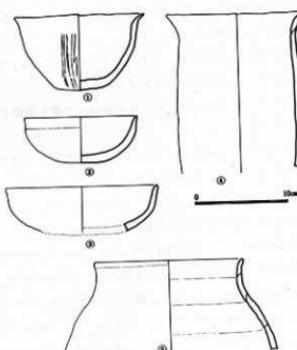
##### 土器

壇 (①) 北壁に接して出土している。

口縁部は外反し端部は尖っている。体部はやや膨らみをもち、底部へすぼまる。底部は丸味をもった平底を成す。口縁部はヨコナデ、体部には擦痕がみられる。胎土は、石砂粒を含み焼成は普通で灰褐色を呈する。体部には煤の付着を見る。

杯 (②) 西壁に近い位置に出土している。口径 12.1cm、器高 4.9cm、口縁部下に棱をもち輪部は尖る。口縁部はヨコナデで体部及び底部はヘラ削りである。内面は横位のヘラ調整である。胎土は密で細砂粒を含み焼成は良好で淡赤褐色を呈する。

浅鉢～（丸鉢）～（⑤） 北壁に接して出土している。口縁部下に棱をもたらす端部は



第26図 209号住居跡出土土器実測図

丸い。口縁部はヨコナデ、外面は不明。内面は粗いヘラ磨き調整である。胎土に微細粒を含み焼成は良好で黄褐色を呈する。

壺～（長胴壺形土器）～（⑥） 北東隅に近接して出土している。口縁部はゆるやかに外反し、頸部はあまり縮まらない。胸部も膨らみをもたず長胴となる。輪積み成形である。口縁部はヨコナデ、肩部には擦痕がみられる。内面はヘラ調整がなされている。

壺形土器 (⑥) 破碎された状態の出土であり復元不能である。口縁部は外反しながら立ちあがり端部もやや折り曲げ気味である。頸部はそれほど縮まらず、肩部はしだいに張りだす。輪積み成形である。口縁部はヨコナデであり、肩部は斜め削りが施されている。胎土に石粒を多量に含み、焼成は普通で淡赤褐色を呈する。

#### 第210号住居跡（第27図）

##### 位置

北部集落から南に 15m 離れて存在する。北側には 9号溝が東西に延びている。

##### 構造

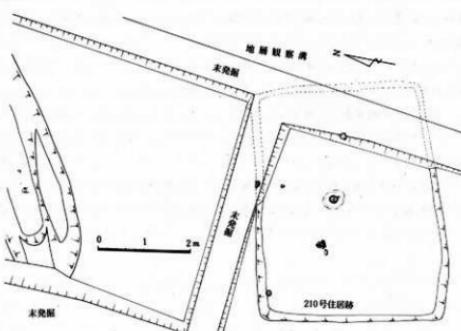
形状 東辺部は調査不能のため未確認であるが東西に長い方形状を呈するものと思われる。

規模 北辺長約 4.8m、南辺長約 5m、東辺長約 3.5m、西辺長 3.8m。

主軸方位 N - 14° - E

炉跡 住居跡のほぼ中央部に口縁部を欠いた壺形土器が掘られており、周囲が焼土化していることから、これが炉跡と思われる。

床・壁 床は平坦であり、わずかに西傾斜している。壁は西壁が良く残り、外傾している。壁高は 25cm 内外を示す。



第27図 210号住居跡実測図

### 出土遺物（第28図）

須恵器（①、③、⑥）

壺（④⑤）④は北西隅より出土した。

口径10cm、器高4cmを計る。口縁部は体部との境に稜をもち直線的に立ちあがる。ロクロ成形でヘラ切り離し、底部にはヘラ記号をみる。内外面ともヨコナデ調整である。胎土は微細砂粒を含み焼成は良好で淡灰褐色を呈する。

⑤は高台付であり口縁部を欠く。体部は直線的に立ちあがる。付高台は体底部をへらで切り、造りだしている。ヨコナデ調整で底部はへら切りである。胎土に微細砂粒を含み焼成は良好で青灰色を呈する。

脚台（⑥）北壁にかかって出土している

受け部の一部と脚部を欠いたものである。受け部と脚部とは別個につくられ、中間部でつながれている。受け部はロクロ成形、脚部は輪積み成形である。受け部は直線的に開きながら立ちあがり、脚部は同様に開き、裾部は大きく外反する。つなぎ目に2本の沈線をもつ。内外面ともヨコナデ調整である。器壁の一部に自然釉が付着している。胎土は密で砂粒を含む。焼成は良好で灰褐色を呈する。

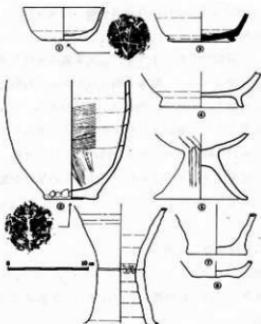
土師器（②、④、⑤、⑦、⑧）

變形土器（②、⑦）②は中央部の燒土内に据えられた変形土器で口縁部を欠いている。脚部がやや膨らみ、底部は貼り付け状の丸底を成す木葉底である。輪積み成形であり、外面は縱方向のヘラナデ、内面は粗い刷毛目調整である。胎土に石粒を含み、焼成はやや軟質で灰褐色を呈する。脚部下に様の付着をみる。⑦は変形土器の底部であり、木葉底である。

壺（④）高台付の壺であり、体部は内窓気味に立ちあがる。高台はやや開き気味に立つ。

高壺（⑤）壺部は口縁部を欠く。底部は平たく体部はゆるやかに立ちあがるものと思われる。脚部は基部が縮り裾部へ大きく開く。脚部は指頭によるつまり返しがみられる。壺部、脚部とともにへら削りで壺内面はへら磨きである。胎土は微細砂粒を含み焼成は良好で淡黄褐色を呈する。

壺（⑥）底部はへら切り離してあり、体部は薄く開き気味に立ちあがる。ヨコナデ調整。胎土に石砂粒を含み焼成は普通で赤褐色を呈する。



第28図 210号住居跡出土土器実測図

### 溝状遺構（1号～10号溝）《別添図》

第2次調査では、住居跡の検出とともに溝状遺構の検出もみられた。溝状遺構は、主に南部集落に伴うものと思われ北部集落においては明確な遺構検出はみられなかった。

溝状遺構の番号については、調査過程において検出された順に番号を振っている。

#### 第1号溝状遺構

201号、202号～203号住居跡の東方に接した、南北方位（N-3°-W）に17mの長さで検出されている。溝幅65cm、深さは、南部で39cm、北部で33cmを計る。溝底標高は北部で3.62m、南部で3.60mでありほぼ平行の底面を成す。断面はV字状を成す。南端部は東方に折れ曲がって7号溝となり、北端部も東方に折れ曲がって4号溝となる。中間部は2号溝と6号溝が切り合っている。溝内から埴等の遺物を出土している。

#### 第2号溝状遺構

201号住居跡と202号住居跡との間の東西方位（N-100°-W）に現長6mで検出されたが西方になおも延長するものと思われる。溝幅70cm、深さは1号溝と切り合う東端で16cm、西方部では36cmを計る。溝底標高は東方で3.92m、西方で3.72mであり、西方向に傾斜している。

#### 第3号溝状遺構

1号溝が折れ曲がって4号溝の西端部から若干ずれる位置の南端に南北方位（N-2°-W）の振り込みがある。現長は11.5mで北部は鈍角に東方へ折れ曲がり、そこから6mの地点が端部となる。溝幅80cm、深さは南方で15cm、北方折れ部で18cm、端部で20cmを計る。溝底標高は南方で3.77m、北方で3.72m、端部で3.61mで北傾斜から東傾斜となる。断面はU字状を成す。

#### 第4号溝状遺構

1号溝北端部から東方に折れ曲がった溝で東西方位（N-98°-W）に10m掘られて端部に至る。溝幅70cm、深さは西方で19cm、東方で23cmを計る。溝底標高は3.73m、東方で3.69mで東傾斜となる。

#### 第5号溝状遺構

204号住居跡の南西隅を切って南北方向（N-27°-W）に現長7mが検出されたが、南方はなおも延びるものと思われる。溝幅80cm、深さは北方で17cm、南方で20cmを計る。溝底標高は北方で3.8m、南方で3.81mの南方傾斜となっている。

#### 第6号溝状遺構

2号溝に接して1号溝を切る状態で東西方向（N-103°-W）、に現長5mが検出されたが東方はなおも延びるものと思われる。溝幅75cm、深さは西方で27cm、東方で47cmと深くなる。溝底標高は西方で3.75m、東方で3.55mの東傾斜となっている。

#### 第7号溝状遺構

1号溝の南端が折れ曲がって204号住居跡を横切る溝で、東西方向（N-97°-W）に現長5mが検出され、東方はなおも延びるものと思われる。溝幅70cm、深さは住居跡を切っているため不明。

#### 第8号溝状遺構

3号溝の北方に接して、北西から南東方向（N-40°-W）に延びる。現長は8mで南東部は南北に

折れ曲がって2mほどで端部となる。北西部はなおも延びると思われる。溝幅50cmで深さは北西部24cm、南東部で28cm、南端部で31cmを計る。溝底面標高は北西部で3.74m、南東部で3.67mの南東方向傾斜となっている。

#### 第9号溝状遺構

210号住居跡から北方に約5m程離れて検出されており205号住居跡を含む北部集落とを分ける形となっている。溝は南北方向から北東方向(N-124°-W)に延びて10号溝を切り交差している。南西部、北東部ともになおも延びると思われる。溝幅130cmで深さは60cm~70cm掘り込まれている。断面はV字状を成す。溝底標高は北東部で4.71m、南西部で3.98mであり、南西部方向に傾斜している。

#### 第10号溝状遺構

9号溝と交叉しており、東西方位(N-87°-W)に延びる溝である。東方部においてはやや南東方向に折れ曲がり、浅く、細くなる傾向を示している。断面はV字状を成し、溝幅100cmで深さは約50cm平均である。溝底標高は東方で4.26m、西方で4.13mであり西方向に傾斜している。

#### 4. 溝状遺構出土遺物及びその他の出土遺物 (第29図①~⑥)

各溝状遺構から、流れ込みによる遺物がそれぞれ出土しているが若干未整理な面があるため、主なものだけを取りあげる。

1号溝に伴う土器(①、②) ①は口径約8.6cm、器高6.1cmの土師器壺である。口縁部は体部との境に棱をもって内側し、体部は内湾する。口縁部及び内面はヨコナデ、体部から底部にかけてはヘラ削りの調整である。胎土に砂粒を少量含み焼成は良好で赤褐色を呈する。②は口径14.6cm、器高4cmの土師器壺である。体部から口縁部へは渦曲しながら立ちあがり端部にわずかな反りをみる。口縁部はヨコナデ、体部の外面はヘラ磨きで底部はヘラ削り調整である。胎土に微細砂粒を含み焼成は良好で淡赤褐色を呈する。

9号溝に伴う土器(③、④) ③は土師器高杯である。杯口径10.8cm、脚部標高7.5cm、器高7cm。杯は体部から口縁部へと内湾気味に立ちあがり、端部にわずかな反りをみる。脚部は基部が弱く、根部が大きく広がるもので端部の反りはない。杯部は外表面とともにヘラ磨き。脚部の基部はヘラ削り、根部はヨコナデ、内面はヨコナデ調整である。胎土に少量の砂粒を含み焼成は良好で淡褐色を呈する。④は須恵器盤であり頸部を欠く。肩部は強く張り、浅い沈線をめぐらしている。体部は半球状を成す。肩下部に直径1.5cmの穿孔をみる。残存する頸部には斜行叩きがみられ、その上にヨコナデが見られる。体部はヨコナデ、底部はヘラ削り調整である。胎土に砂粒を含み、焼成は良好で赤褐色を呈する。

#### その他、遺構外の土器(⑤~⑧)

##### 土師器(⑤、⑥、⑦)

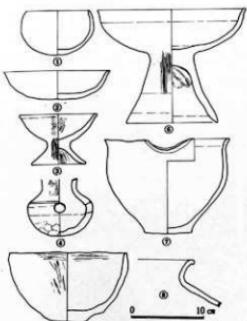
鉢(⑤) 口縁部はわずかに内傾し、体部は直線的に立ちあがる。底部は厚く小さい平底を成す。

口縁部はヨコナデ、脚部は粗い削り、胎土に石砂粒を含み焼成良好で赤褐色。

片口鉢(⑥) 口縁部は端部近くで外反し、胸部は張らみ、底部は平底で木葉底、口縁部ヨコナデ、脚部ヘラ削り、内面ヨコナデ調整。胎土に多量の石粒を含み焼成良好。灰黒褐色。

高杯(⑦) 端部は大きく開き丸い鉢形を呈する。脚部は基部が細く、直線的に聞く裾部をもつ。口縁部ヨコナデ、体部刷毛目、脚部ヘラ磨き及び刷毛目、内面ヨコナデ調整。胎土に砂粒を含み焼成は良好。黄褐色。

須恵器 鉢(⑧) 大きく外反し、端部は丸くなる口縁部片である。口縁部はヨコナデ、脚部は格目叩き調整である。



第29図 溝状遺構出土土器及び  
その他の出土土器実測図

#### 5. 土層観察トレチと出土遺物

(第30、31図)

調査過程においては、南部集落と北部集落の間には当初、遺構らしきものは確認しなかった。そこで下部土層観察のために大型掘削機(コンボ)を用い幅1.2m、長さ25mのトレチを入れたところ、9号、10号溝と210号住居跡の南東隅を検出した。

また、遺構外のセクション遺物として大型の壺形土器を発見した。土層及び出土状態は第30図に示した。

##### 土師器壺(第31図)

頸部が強く繰り、口

縁部は枯土帶を1重貼

付けした成形で短く立

ちあがる。肩部は強く

張り出し副部は底部へ

と直線的にそぼむ。輪

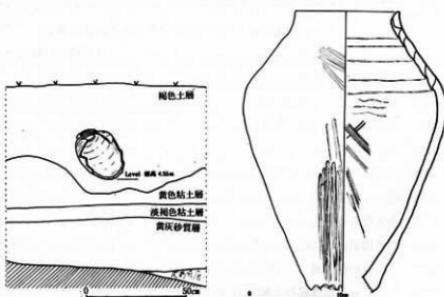
積み成形で口縁部はヨ

コナデ、脚部はヘラ削

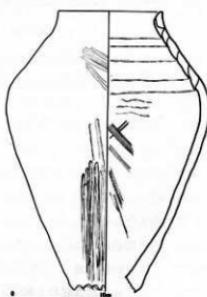
り。胎土は密で、少量

の砂粒を含み、焼成は

良好で赤褐色を呈す



第30図 土層観察トレチ  
出土土器実測図



第31図 土層観察トレチ  
出土土器実測図

## VI 第3次発掘調査

### 1. 層位及び住居跡内の土層堆積状況（第32図）

この調査では、調査可能区域の限界にあるたる西壁部において土層観察に適した層序を見い出すことができた。また、この層序には309号住居跡の1辺を横断する面も検出され、住居跡内の埋土の堆積状況をも観察することができた。層位は北側でⅠ、Ⅱ、Ⅲ層の上層が観察されるが、南側にはこの層がなく、Ⅳ層の黄褐色砂質土層が上面にきている。また、Ⅳ層からⅥ層まで共通であるが南側ではⅦ層まで観察することができる。このことから旧地形は北側が高く、南側に傾斜していたことが推察できる。



図版7 浄土江遺跡第3次発掘調査全景



第32図 309号住居跡南北断面土層図

層位	住居跡内堆積土層
0層 表土層（アスファルト道路）	1. 黒色層（7.5 YR 2/1）
I層 黒褐色土層（7.5 YR 2/2）	2. 黒褐色層（7.5 YR 2/2）
II層 褐色粘質土層（10Y R 4/4）	（2'）にぶい黄褐色層（10Y R 4/3）
III層 暗灰黄褐色土層（2.5 Y 4/2）	3. 暗褐色層（7.5 YR 3/3）<2'を少量混入>
IV層 黄褐色砂質土層（10Y R 4/3）	4. 黑褐色層（10Y R 2/2）
V層 暗灰黄砂質土層（2.5 Y 5/2）	5. 暗褐色層（10Y R 3/3）<2'をやや多く混入>
(V')層 黄褐色砂質土層（10Y R 4/1）	（5'）暗灰黄色層（2.5 Y 4/2）
VI層 明黄褐色砂質粘質混り土層（10Y R 6/6）	（5'）黃褐色層（2.5 Y 5/3）
VII層 暗灰黄砂質土層（2.5 Y 5/2）	6. 褐色層（10Y R 4/4）<4'を2'を多量混入>
VIII層 黄褐色砂質粘質混り土層（10Y R 5/6）	7. 黒色層（7.5 YR 1.7/1）<炭化物を多量混入>
	8. 黑褐色層（2.5 Y 3/1）<2'をブロック状に混入>

（註）上記土層観察には「標準 土層報」（監修 農林省農林水産技術会議事務所）を参考にした。

### 2. 住居跡と出土遺物

#### 第301号住居跡

位置は、第2次調査によって検出した南部集落の西側部分にあたり202号住居跡に接して見出された。住居跡は南北に埋設されたガス管、水道管の掘削溝、刑務所当時の外壁の基礎等によって破壊されており、形状、規模等は不明確であるが唯及び床の一部は検出することができた。床面には焼土の分布も検出されて住居跡中央部に炉跡があったことをうかがわせる。

#### 出土 遺 物（第33図①～須恵器②、③、④～土師器）

器台（①） 破片であり全体的な器形は不明である。上下に接縫が見られる。この接縫で区分された間には三角形の透孔が施されている。さらにその透孔の間に山字形の透孔が施されている。小木原古墳出土の器台にその類例が認められる。

坏（②、③） ②は口径15.7cm、器高3.4cmの浅い坏である。口縁部はつまみナデで端部は尖る。輪積み成形で外面は粗いヘラナデ、内面はヘラ磨き調整である。胎土に微細砂粒を含み焼成は良く、淡赤褐色を呈する。

③は高台付であり、口縁部は直線的に立ちあがり端部は尖る。付高台は貼り付けであり外傾する。体部内外面はヨコナデで、高台はヘラ削りである。胎土に少量の砂粒を含み焼成は普通で赤褐色を呈する。

壺（④） 口縫部は大きく外反し、頸部において段をもつ。胴部は脛らます直線的である。内外面ともヨコナデ調整である。胎土に石砂粒を多く含み、焼成は良く赤褐色を呈する。胴部に煤付着。



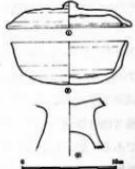
第33図 301号住居跡出土土器実測図

#### 第302号住居跡

位置は、301号住居跡の北に接して検出され、さらに北側には307号住居跡が接している。この住居跡は床面に焼土の分布する炉跡を検出したのみで、301号住居跡と同様に形状、規模等は不明である。また出土遺物も不安定状態の出土であり詳細について割愛する。

#### 第303号住居跡

位置は、第2次調査の北部集落の208号住居跡の北西方向にあたり南北に延びる南北溝を切って検出された。北西に306号住居跡と接し、さらに北に304号住居跡が接している。形状は方形状を呈する。主軸方位は、N -20° - W。西壁南側寄りに竪を検出している。袖部は黄色粘土質で築き固められており、中央部に壺形土器が押しつぶされた状態で出土しているが支脚はみられない。床面は平坦であり、壁は大部分が崩壊している。規模は北辺長3.8m、南辺長3.7m、東辺長3.8m、西辺長3.4mを計る。



第34図 303号住居跡  
出土土器実測図

### 出土遺物（第34図①、②須恵器、③土師器）

①、②は、住居跡南西隅に接して出土したもので、身と蓋を成するものである。

壺蓋（①） 口径13.1cm、器高2.8cmを計る。口縁部内面にかえりを有し、天井部に尖り状のツマミを付す。かえりは細く広い。天井部は回転ヘラ削りで口縁部はヨコナデ、内面は刷毛目調整である。胎土に微細な砂粒を含み、焼成は良好で青灰色を呈する。

壺身（②） 口径12.2cm、器高4.5cmを計る。蓋受け部をもたず底部は平坦につくられ部体から口縁部にかけては直線的に立ちあがる。クロ成形でヘラ切り離しによる。内面及び口縁部はヨコナデで、体部下はヘラ削りである。胎土に微細な砂粒を含む。焼成は良好で灰褐色を呈する。

高杯（③） 壺部と脚部を欠き基部のみを残す。基部は繊り、脚部に開口がある。ヘラ削りを施し、内面奥部には指頭によるナデをみる。赤褐色を呈する。

### 第304号住居跡

位置は、303号住居跡より北に約5.5m離れて検出され、303号と同様に南北に延びる11号溝を切っている。形状は方形状を呈するものと思われる。規模は西壁を欠くが、ほぼ $5.5 \times 5.3m$ であろう。主軸方位はN-11°-W。

竈（第35図） 北壁中央部に附設されており、火袋袖部は黄色粘土で築かれていた。床面は平坦で煙道に向って傾斜している。東西幅は80cm、西側袖部28cm、長さ95cm、東側袖部20cm、長さ90cmで両端部ともに丸くなる。床面には焼土が堆積し、その上に輕石製支脚2本が据えられていた。火袋奥部は住居跡の壁となる黒褐色土層を掘り立めている。煙道はさらに壁を斜行に掘りぬいて住居跡の縁よりも35cm離れた位置で短径15cm、長径4.3cmを計る梢円形状となつて開口している。

### 出土遺物（第36図 土師器①、②、③、④、⑤、⑥、須恵器⑦、⑧、⑨）

壺形土器（①、②、⑦、⑧） ①は住居跡中央部に掘られたもので口縁部を欠く。脚部最大径18cmを計り内溝気味に腹らむ。底部は平底を成す。器厚は全体的に厚く底部ではさらに増す。輪積み成形で外側はヘラ削り内

面はヘラナデ調整である。

脚部に煤の付着を見る。胎

土に砂粒を含み焼成は良好

で黄褐色を呈する。②は脚

部が直線的に開きながら立

ちあがり、口縁部はやや内

傾する。煙道は尖る。輪積

み成形で口縁部はヨコナデ

調整で他は磨滅しており不

明である。胎土に石粒を含

む微細砂質で焼成は良好

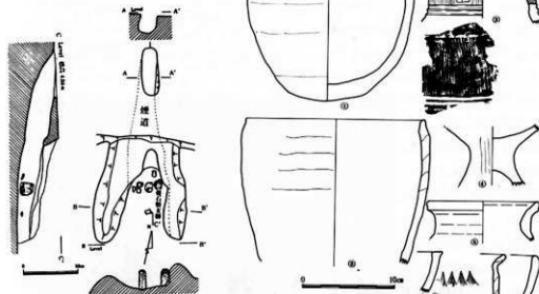
で淡黄褐色を呈する。⑦は口

縁部が短く「く」字形に外



図版8 304号住居跡

反する。器厚は薄い輪積み成形で口縁部は内外面ともヨコナデ、脚部は粗い斜位削り調整である。胎土に大きな石粒を含み焼成は良好で黄褐色を呈する。



第35図 304号住居跡竈実測図

第36図 304号住居跡出土土器実測図

③は口縁部が肥厚しや内溝的に立ちあがり、端部は丸くなる。④に類似するものである。口縁部は内外面ともにヨコ削痕による調整であり外面は黒く焼けている。胎土に砂粒を含み、焼成は普通で内面は淡黄褐色を呈する。

高杯（④） 壺部と脚部を欠く。基部は繊り、脚部は広がる。壺底部はヘラ磨きで基部はヘラ削り調整である。胎土は石粒を含む微細砂質、焼成は良好で赤褐色を呈する。

器台（⑤） 破片で全体的な形器は不明であるが、根広がりを呈するものと思われる。上下に3本の縫線がみられ、縫線で区分された間には長方形透孔が施されており、透孔間に上下双方から横擦痕がみとめられる。胎土に微細砂粒を含み焼成は良好で濃青灰色を呈する。

壺（⑥） 頸部及び口縁部の破片である。頸部は繊り直線的に立つ。口縁部は外反して端部近くで立ちあがる。内外面ともヨコナデ調整である。胎土に微細な砂粒を含み焼成は良好で黒灰色を呈する。

鉢形土器？（⑦） 口縁部のみの破片であり器形は不明。口縁部は内溝気味に開きながら立ちあがり端部は平底となる。外面に木口状によるものと思われる斜位刷毛目列が認められる。内外面はヨコナデ調整である。胎土に微砂粒を含み焼成は良好で青灰色を呈する。

### 第305号住居跡

位置は304号住居跡の北側約4mに検出された。この住居跡は完掘することができず、北東隅を含む一部を調査したにすぎない。南北に延びる11号溝が東に接しており、形状はおそらく方形状を呈す

るものと思われるが規模、方位等は不明である。

遺物の出土した周囲には焼土が見受けられ變形土器が床面に据えられていた。この鉢形土器には底部に川原石による添え石があることから、この位置は炉跡としての可能性が強いものと思われる。

#### 出土遺物（第38図①、②、③）

變形土器 ① 口縁部を欠いている。

胸部は最大径 17.3cm を計り内面氣味に脛らむ。底部はだいにすばり丸底化する。

輪積み成形で外表面は継位のヘラナデ、内面はヨコナデ調整である。胸部下位には多量の煤が付着している。胎土に石粒を含み焼成は普通で淡黄褐色を呈する。

鉢形土器 ② 口径 14.8 cm 器高 11

cm を計る小形の深鉢である。胸部から口縁部は直線的に開きながら立ちあがり、口縁端部近くになってわずかに外反し底部は尖る。

輪積み成形で口縁部及び内面はヨコナデ、外表面は粗い木目割り調整である。胸部及び内面上部に煤の付着をみる。

胎土に石粒を含み焼成は普通で灰褐色を呈する。

杯 ③ 口径 12.5 cm、器高 4.4 cm を計る。底部はやや丸く口縁部は直線的に開きながら立ちあがり端部は尖る。口縁部はヨコナデ、体部はヘラ磨きで内面調整は不明、底部はヘラ切りである。胎土は石質で少量の石粒を含む。焼成は良好で赤褐色を呈する。

#### 第306号住居跡

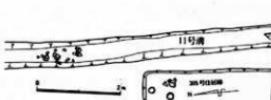
位置は 303号住居跡の北東に接しているが北西隅の一部を検出したにすぎない。北西隅の状態からみて形状はおそらく方形を呈するものと思われるが規模等については不明である。また遺物も見い出せなかった。

#### 第307号住居跡

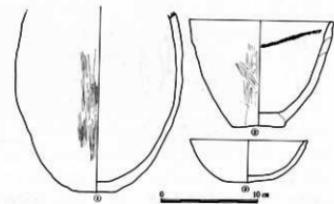
位置は南部にあたり 302号住居跡の北側に接して検出された。住居跡は今回の調査可能区域の限界にあたる西部にその大部分がかかっており、完掘はできなかった。壁及び床面の一部は検出されたが形状、規模等については不明である。遺物は床面に變形土器の底部と数点の土器片がみられた。

#### 出土遺物（第39図）

變形土器、口縁部及び胸上部を欠く。底部は平坦氣味の丸底を成し脛らみをもつ胸部へ立ちあがっていく。全体的に薄手の土器であり、外表面には木口によるものと思われる継位の擦痕が見うけられ内



第37図 305号住居跡、第11号溝実測図



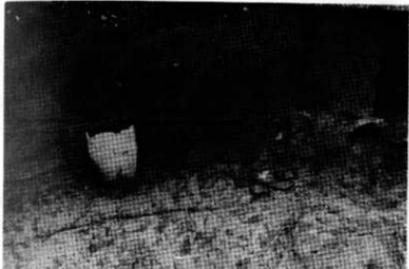
第38図 305号住居跡出土土器実測図

外面ともに煤が付着している。胎土に石粒及び砂粒を含み焼成は良好で茶褐色を呈する。

#### 第308号住居跡（図版9）

位置は 301号住居跡の南側にあたり、住居跡の大部分が調査区西壁にかかっている。したがって住居跡の断面の間にかかる遺物を見い出しにすぎず形状、規模等は不明である。

第39図 307号住居跡出土器実測図



図版9 308号住居跡断面遺物

#### 出土遺物

(第40図①、②)

遺物は、いずれも住居跡の断面遺物として取り上げたものである。

變形土器 ①、②

いずれも土器器である。①は口縁部の一部と底部を欠いている。口径約 20.5cm 胸部最大径 26cm。頸部が細り、口縁部は外反して端部は尖る。胸部は強く脛らみ、

球形を呈する。口縁部はヨコナデ、頸部は木口面での横位ナデ、胸上部は粗いヘラ状による継位磨き、底部はヘラ削りであり、内面はヘラ磨き調整である。胎土に微細砂粒を含み焼成は良好で黄褐色を呈する。②は口縁部を欠く長胴形の變形土器である。胸部はわずかに脛らみ底部へは直線的にすばむ傾向にある。底部は小さい平底を呈し、ヘラ記号が見うけられる。

輪積み成形で、外表面は継位のヘラナデ調整である。外表面は胸下部に煤が付着し、内面には炭化物が付着している。胎土に石粒を含み、焼成は良好で灰褐色を呈する。

第40図 308号住居跡出土土器実測図

### 第309号住居跡（第32図、図版10）

位置は、308号住居跡の南にある。308号住居跡と同様に調査区西壁の断面に検出されたもので、形状は不明であるが規模としては1辺が6.2mを成すものと思われる。土層図によると床面は2重床になっている。1段目の深さについては上部が削除されているため不明であるが、現高は南壁高20cm、北壁高40cmを計る。2段目は床面幅4.6mを計る。掘り込みは1段目より南側で25cm、北側で15cmを計る。また、この住居跡では住居跡発掘後の土層堆積状況を観察することができた。最初に1段目の床部分が埋まり、その後に1段目の両側壁に流れ込みがあつて、逆円錐状の産地ができ、そこに順次、埋土が堆積していったと思われる。（第32図参照。）なお、断面からの出土遺物はなかった。



図版10 309号住居跡断面

### 3. 溝状遺構と出土遺物

#### (1) 溝状遺構（別添付図、図版11）

第3次調査区では、第2次調査の際に検出された第9号、第10号溝の以北に複数の溝状遺構を検出したが、同以前においては擾乱状態が著しく、確定的な溝状遺構は検出しえなかつた。以北に検出した溝状遺構は南北に延びる第

11号溝（南北溝）を主体とするものであった。溝状遺構の番号については、9号10号溝の延びもあることから第2次調査時のものから通し番号を用いることにした。

#### 第9号溝状遺構

第2次調査検出の9号溝の延長であり、形状・規模ともに同様である。傾斜は南西方向である。



図版11 9号、10号、11号溝状遺構

### 第10号溝状遺構

第9号溝と同様に第2次調査検出分の延長溝であり、現状、規模とも前者と同様である。

#### 第11号溝状遺構（南北溝）

305号住居跡の東辺に接する。304号、303号住居跡を縦断して、10号溝に注ぐ南北方位（N - 3° - W）の溝で現長47mを計るが北端はなおも延びるものと思われる。溝幅60cmで深さは50cm～60cmを掘り込んでおり、断面はV字状を成す。溝底面の標高は北部で4.48m、303号住居跡と304号住居跡の中間で4.37m、10号溝に接する南部で4.20mを計り、南方向に傾斜している。溝と303号、304号住居跡の関係については、切り合い状態からみて溝状遺構が古く、その溝状遺構を切って新たに住居跡が構築されたものとみられる。また、この溝状遺構からは流れ込みによる遺物の出土が多く見受けられる。

#### 第12号溝状遺構

第10号溝と交叉して、さらに北西方位（N - 13° - W）へと延びる溝である。10号溝より南東に延びる溝は上部が削除され、床面のみを残している。北西方位に延びる溝は、溝幅50cm、溝底面の標高は10号溝寄りで4.45m、北西部では4.42mで北西方位に傾斜している。

#### 第13号溝状遺構

第11号溝の西側から平行に北西方位（N - 5° - W）へと延びる溝で14号溝、15号溝と交叉する。溝幅30cmで深さは溝上部削除のため不明である。溝底面標高は南部で4.47m、14号溝との接地部分で4.43mを計り、北西方位に傾斜している。溝は両端ともになおも延びるものと思われる。

#### 第14号溝状遺構

第11号溝、12号溝と交叉して東西方位（N - 83° - W）に延びる溝で、両側は15号溝に交わっている。溝幅40cm、深さは約50cmであり、溝底面標高は東側4.16m、西側3.94mの西側傾斜となっている。西側の15号溝に交わるところでは周開からの掘り込みがみられ、深い窪地化している。

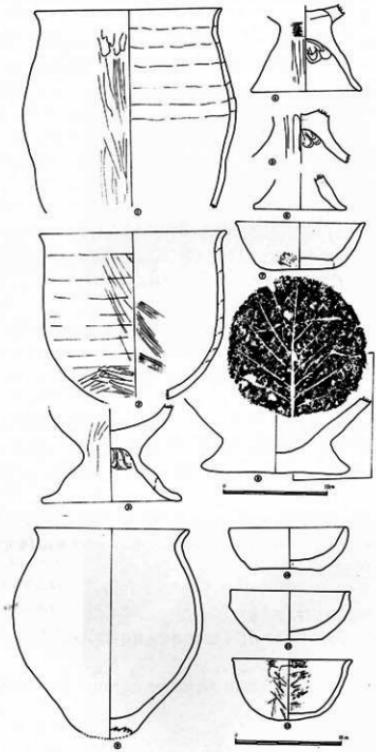
#### 第15号溝状遺構

14号溝と同様に11号溝、12号溝と交叉し、そこからやや南に傾く方位（N - 115° - W）に延びる溝で西側において14号溝と交わる。溝幅40cm、深さは約45cmである。溝底面標高は東方で4.39m、西方で4.20mの西傾斜となっている。

#### (2) 溝状遺構出土遺物（第41図、第2表）

11号溝からの出土が大部分を占めており、1部14号溝にも見受けられた。

（註）(1)『小木原古墳』「九州総貫自動車道埋文化財調査報告(1)」宮崎県教育委員会 1972



第41図 溝状造構出土土器実測図

第2表 第3次調査 溝状造構出土土器観察表

番号	出土地	器種	法 量	形 态 の 特 徴	技 法 の 特 徴	備 考
1	11号溝状 造構	甌	口径 約18cm 底部径 約17cm 器 高 約20.6cm	・頸部はわずかに傾り、口縁部は短く外反する。 ・底面は尖る。 ・内面はややに剥がれ、凹みを見受けける。 ・底面は完全に厚い。	ワツト成形 ・外面 口縁部ヨコナデ ・内面 口縁部へラ削り、底部へラ削り、側面斜行削痕	焼成 良好 色調 黒褐色 胎土 石粒多く含む。
2	*	深 鉢	口径 約18cm 器 高 約17cm	・口縁部は最も直線的にたちあがり、端部近くでやわらかに外反し、底面は丸くなる。 ・底面は丸くなる。	ワツト成形・指圧のばし。 ・外面 口縁部ヨコナデ ・内面 斜行削痕 底部、粗いへラナダ ・内面 不特定方向削毛目	焼成 良好 色調 黑褐色 胎土 石粒多く含む。
3	*	高 环 (環)	腹部直径 13.6cm 底部高 6.8cm	・頸部は基部がやや太く、内面気泡間に開く。 ・底面は大きく開いて外反する。 ・底面は尖る。	マツタゲ成形 ・腰部はリッパによる。 ・底面はへラ削り。 ・底面は斜行削痕アーチ調整。	焼成 良好 色調 黑褐色 胎土 石粒多く含む。
4	*	高 环 (環)	腹部直径 10.8cm 底部高 7.8cm	・基部が傾り、底部は内面気泡間に開く。 ・底面の反りはなく、尖る。	マツタゲ成形 基部上部ヨコナデ 腰部は粗いへラ削り。 内面及び底部はヨコナデ	焼成 良好 色調 黑褐色 胎土 石粒多く含む。
5	*	高 环 (環)		・基部が太く、底面は短く、大きく述べる。	・基部はヘラ削り。 ・底面はヨコナデ	焼成 良好 色調 黑褐色 胎土 石粒多く含む。
6	*	高 环 (環)	腹部直径 9cm	・底部のハリッケ部分である。 ・底面は、やや反りをもつ	・底面ハリッケ ・底面は内外面ともヨコナデ	焼成 良好 色調 黑褐色 胎土 石粒を含む。
7	*	环	口径 12.6cm 器 高 4.6cm	・全体から口縁部は直線的に開きながら、たたかがる。 ・底面は平たくてやわらかに外反する。 ・底面は平坦である。	外側 〔口縁部 ヨコナデ 底部 ヘラ削り 内面 〔口縁部 ヨコナデ 底部 ヘラ削り〕	焼成 良好 色調 黑褐色 胎土 斜削り柱
8	*	甌 底 部	底部径 14.5cm	・大型の變形土器の底部と思われる。 ・円滑なハリッケの底部であり、本底底をみると。	・台形状のハリッケ底部 ・木底底 ・ナダ調整	焼成 良好 色調 黑褐色 胎土 石粒多く含む。
9	*	甌	口径 14.5cm 底部径 13.5cm 器 高 19.8cm	・頸部は傾り、口縁部は短く外反する。 ・内面は強く瓶らぎ形を呈する。 ・底面は底部は、しだいにぼぼまり、底面は小さく、尖り気味の丸底を呈する。	ワツト成形 外側 口縁部 ヨコナデ 底部 ヘラ削り 内面 へラ削き	焼成 良好 色調 黑褐色 胎土 砂粒多く含む。 外側に多量の煤粉着生。
10	14号溝状 造構	甌	口径 11cm 器 高 3.8cm	・全体から口縁部は内面気泡間にたちあがる。 ・底面は平たくて木底底を呈する。 ・底面が全体的に厚い。	外側 〔口縁部 ヨコナデ 底部 ヘラ削り 内面 〔口縁部 ヨコナデ 底部 ヨコナデ〕	焼成 良 色調 黑褐色 胎土 石粒砂粒質
11	*	环	口径 11.2cm 器 高 4.5cm	・口縁部は直線的にたちあがる。 ・口縁部から全体にはねをもつ。 ・底面は丸底を呈する。 ・底面は平底となる。	外側 〔口縁部 ヨコナデ 底部 ヘラ削り 内面 ヨコナデ	焼成 良 色調 黑褐色 胎土 石粒砂質
12	*	甌	口径 11.4cm 器 高 5.7cm	・全体から内面気泡間にたちあがる。 ・口縁部は直線的にたちあがる。 ・底面は丸底を呈する。 ・底面は平底となる。	外側 〔口縁部 ヨコナデ 底部 ヘラ削り 内面 〔口縁部 ヨコナデ 底部 ヘラ削り〕	焼成 良好 色調 黑褐色 胎土 石粒砂質

## Ⅷ まとめ

淨土江遺跡の所在は、以前から知られるところであったが刑務所構内という特殊な事情から調査を行ない得ない状況にあった。ところが昭和51年6月に刑務所が宮崎市大字系原に移転することとなつたため、その再開発に先懸けた宮崎市教育委員会主体となって発掘調査を計画し、昭和52年、昭和53年、昭和54年の3ヶ年計画で実施されるはこびとなつた。この調査によって古墳時代から奈良時代にかけての集落跡を発見するに至り、宮崎県においては嘗てない生活跡の発掘調査となつたのである。

### 1. 住居跡

第1次調査においてA-2区からは3基の住居跡が検出されたが、限られた調査範囲から完掘することはできなかつた。3基の住居跡は各々が切り合つた状態にあり、切り合い面の観察からは101号住居跡が先行し、続いて102号住居跡、その後、102号住居跡の床面の上に103号住居跡が築かれたと判断できる。住居跡に伴う遺物は希薄であり、また出土品の明確さを欠くくらいもあって各住居跡ごとに分類することは困難な状況にあつた。ただし、第5図の須恵器環は須恵器編年ⅢBからVの時期に相当すると考えられることから、これらの住居跡は6世紀後葉から7世紀前葉時期に位置づけられるものと思われる。またE区においても2基（104号、105号住居跡）を検出しているがA-2区同様に完掘は行なわれておらず住居跡に伴う遺物も発見されなかつた。しかし、住居跡上辺に接し、良好な状態で出土した遺物（第7図⑥、④）は7世紀後葉時期に比定されるものと思われることから住居跡もほぼ同時期に比定してよいのではないだろうか。F-3区では1基の住居跡（106号住居跡）を検出したが、この住居跡も完掘はなされてない。この住居跡から土師器の环、高环の他に粗製の甕、瓶、深鉢等の道具が集積した状態で出土している。出土遺物の环（第10図）からみて7世紀前葉に比定できるものであろう。

以上の如く第1次調査においては6基の住居跡を検出しているが、総じて限られた調査区域内での発掘であったため、形状、規模、方位等については明らかにしない。また時期設定については、單に出土遺物の須恵器から判断したので正確さを欠く恨みはある。

第2次調査では、10基の住居跡と溝状構造を検出しているが、これらは南部集落と北部集落に分けられ時間的にも6世紀前葉から8世紀中葉頃に比定される長い期間の生活跡であったことがうかがえる。これら住居跡の時期比定の指標となるのは南部集落に含まれる204号住居跡であるが、この住居跡からは第20図にみられるような、立ちあがりの高い須恵器環（1）や、（7）のように弥生終末から古式土器にみられる叩きをする有る甕、古式土師器に属するミニチュアの环（8-⑥）等が共伴出土しており、古式土器に古式の須恵器が出現する状況からみて、検出された住居跡群の中では最も先行する住居跡ではないかと思われる。そこで、この住居跡を6世紀前葉に比定し、以下後続する住居跡を6世紀代、7世紀代、8世紀代という大まかな時期設定のうえから分類してみたい。なお、第3次調査においては南部集落に西接して5基の住居跡、北部集落に西接して4基の住居跡を検出してみるとから、これらも含めて分類してみたい。

#### 第Ⅰ期（201号、202号、204号住居跡）

これらの住居跡は1辺が5m内外の正方形に近い床面を呈し、掘り込み縁部がかなりシャープであり壁高も40cmから50cmの高さをもつなどの整形性を有している。また中央部に炉跡をもち201号住居跡では炉跡中央部に長胴の甕を据えている。出土遺物をみると201号住居跡では第14図のうに石器（石斧・敲き石・窓み石・石皿）を伴っていることが特徴的であり、また炉跡に使用された甕は、口縁部が短く外反し、胴部が円筒状を成すなど旁生時代にみられる壘形土器を踏襲するむきが考えられる。202号では前述した204号にみられた立ちあがりの高い环2点と、これらを模倣した土師器の环、また土師器の甕を出土している。204号については前述の通りである。

以上の点から最早各個住居跡の時期を考えると204号住居跡を6世紀前葉時期に、202号住居跡を6世紀前葉から中葉時期、201号住居跡を6世紀中葉から後葉時期に比定できるものと思われ、調査区南部に集中するこれらの住居跡が淨土江遺跡においては最も先行する住居跡と考えられる。

#### 第Ⅱ期（206号、207号、208号、209号、210号住居跡）

これらの住居跡は短辺が3m内外、長辺が4m内外の長方形状の床面を呈するもので、掘り込みは浅く、縁部にもシャープさを失している。また炉跡は、中央部に附設するものと北壁に接して附設するものとに分けられるが中央部に附設するものが先行すると思われる。炉跡を中央部に附設するものには206号、208号、210号住居跡がある。なかでも206号、208号住居跡では、北壁中央部にも附設されていたが207号住居跡にだけは検出されなかつた。209号住居跡では北壁中央部に附設されている。これら住居跡の構築時期にはまず210号住居跡が先行し、次いで206号、208号住居跡が構築され、その後に209号住居跡が構築されたものと考えられる。209号住居跡は、後の205号住居跡によって切られており、207号住居跡は208号住居跡を切って構築されている。時期的には、先行する210号住居跡が7世紀中葉に、最後に構築された207号住居跡が7世紀後葉に比定されるものと考えられる。

#### 第Ⅲ期（203号、205号、301号、303号、304号、305号住居跡）

これらの住居跡には、304号住居跡のように1辺が5mを越す大型のものから、203号住居跡のよう1辺が3m弱の比較的小さな床面を成するものなど、その規模には統一性が失わてくる。また、炉跡に変て壁に接した甕が附設され始めている。遺物からみると203号住居跡では、口縁部が直線的に開きながら立ちあがり、低い付高台をもつ須恵器環（第17図④、⑥）を伴っており301号住居跡からも203号住居跡の須恵器環と同様の土師器環を出土している。303号住居跡では天井部にツマミを有し、内面にかえりをもつ須恵器環と直線的に開きながら立ちあがる須恵器环身（第34図①、②）を伴出し、304号住居跡では長方形透し孔のみられる脚台（第36図⑨）が伴っている。以上の出土遺物からみて、これら住居跡の時期は8世紀前葉から中葉に位置づけて良いのではないかだろうか。

以上、住居跡を3期に分けて概観してきたが第Ⅰ期は204号住居跡を中心とするものであり、調査区南部に集落をもち、やや東方寄りに営まれていた。第Ⅱ期は206号、208号住居跡を中心とする集落であり、調査区北部の東方に寄って営まれている。第Ⅲ期は304号住居跡を中心とするものであり、甕の出現等もあって日常生活にも変化を与えたものと思えるが、住居跡の固定化も失われつつあって、

総体的にはばらつきが感じられるようになり、また調査区の西方へと寄る傾向がみられる。

### 2. 溝状遺構

第1次調査では検出されなかった。第2次調査では、1号溝～10号溝を検出しているが、これらは各々が別条の溝であるとはいはず重複の可能性が強いものである。

南部集落における各溝の関係を観察してみると、1号溝は202号住居跡の北西部に端をもち、南方に延びて201号住居跡の南側寄りで東方に折れ曲がって7号溝となっていることから、7号溝は1号溝の延長とみて良いであろう。また、この溝は掘り込みも深く断面がV字形を成すことから、202号住居跡に伴って最も早い時期に掘られたものと思われる。2号溝は1号溝よりも底面が10cm以上も高く西傾斜となっており、さらに201号住居跡と202号住居跡を区切るかたちとなっていることから、1号溝よりは遅れて掘られたものと思われる。3号、4号溝は同一溝と思われ、溝の掘り込みも浅くなり断面はU字形を呈するが、この溝も1号溝よりも後に掘られたものであろう。周辺に住居跡が検出されていないため住居跡との関連については言及し難い。8号溝についても同様である。9号、10号溝は、南部集落とを区切るかたちで存在する大規模な溝であるが、この溝は住居跡とは直接の関係をもたないと思われる。自然排水上における排水を考慮したものではないだろうか。また、これらの溝は9号溝の方が古く、10号溝はそれに次ぐものと考えられるが前者は早くとも7世紀代に掘り込まれたものと思われる。

第3次調査では9号、10号溝の延長溝の他に南北に長く延びる11号溝が検出されている。この溝は203号、204号住居跡を縦断するかたちで切って掘り込まれており、これらの住居跡よりも早く掘り込まれたと考えられるが南端部は10号溝に注いでいる。14号、15号溝は、11号溝と交叉しているが11号溝を切っていることからみて、11号溝の方がより古いものと思われ、第Ⅲ期の住居跡が営まれた時に掘り込まれたものと考えられる。

### 3. 炉跡及び竈

淨土江遺跡の調査では、炉から竈への変遷をとらえることができる。

第Ⅰ期の住居跡では、201号住居跡にみられるような住居跡の中央部に變形土器を据えた炉とその周囲に分布する広範な焼土が検出された。炉に使用された變形土器は口縁部が短く、「く」字形に外反し、脇部はあまり脛らみをもたない長胴形を呈する。これは器表面に粗い擦痕を有するもので弥生時代終末期にもみられそうな土器である。炉は弥生時代からの引き継ぎで中央部に附設されている。

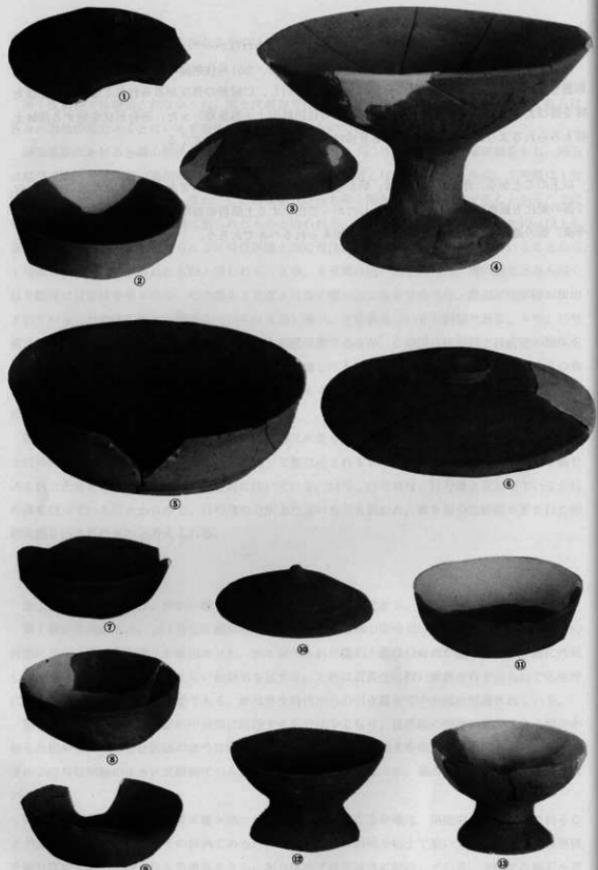
第Ⅱ期になると炉を住居跡の中央部に附設するものは少くなり、住居跡の側壁に附設される傾向が見られ始める。208号住居跡のように中央部と北壁側の2箇所に焼土を検出するものもあった。その後に209号住居跡のように北壁側にのみ焼土を検出するようになるが、竈の築かれた形跡はみられない。

第Ⅲ期になるといよいよ側壁に竈が築かれるようになってくるが竈は、側壁中央部に附設されることが多い。304号住居跡がその好例であろう。竈は、焚き口両袖を粘土で築いており、火袋部は側壁を掘り廻している。煙道は火袋奥部をさらに掘り廻めて住居跡外に開口している。支脚には軽石を多

角柱状に削ったものを使用しており、土製支脚は見受けられなかった。

竈の出現によって使用される變形土器にも変化が生じ、201号住居跡の炉にみられた變形土器とは形態を異にし、脇部から口縁部は長く開きながら直行し、口縁部の外反がみられなくなる。底部は丸味を帯びた平底を呈するようになる。（205号住居跡出土土器参考）また、逆台形状を呈する深鉢土器もみられるようになり、これらにも煮沸痕がみられるようになってくる。

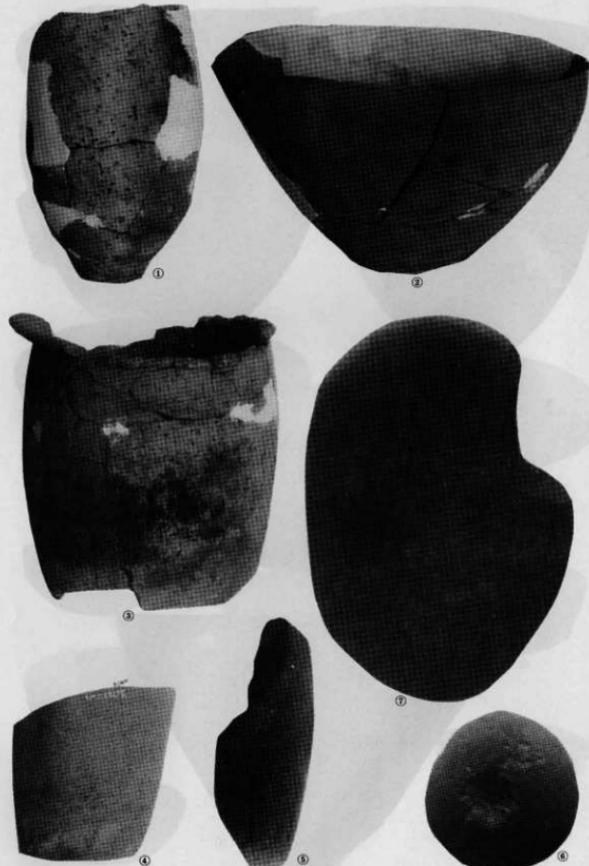
以上のことから、淨土江遺跡では、炉から竈への変遷をみるとともに生活の変化に伴う器の変化も観察できるものである。したがって出土する土師器の編年、竈の形態変化等については今後、他の遺跡での事例を加味した検討が加えられるべきであろう。



図版12 A区(①～④)、E区(⑤、⑥)  
F-3区(⑦～⑩)出土遺物



図版13 F-3区(①～④)出土遺物



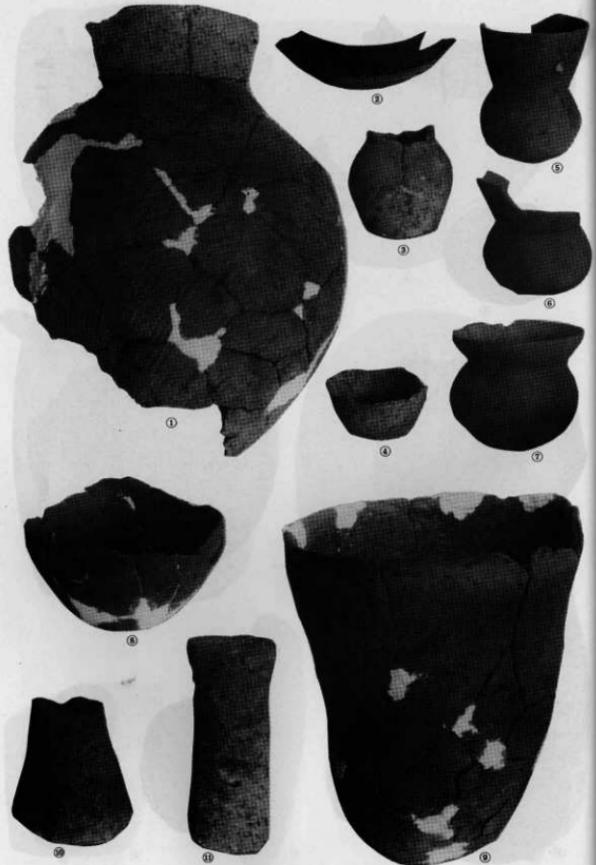
图版14 F-3区 (①、②)、201号住居跡 (③~⑦) 出土遺物

- 46 -

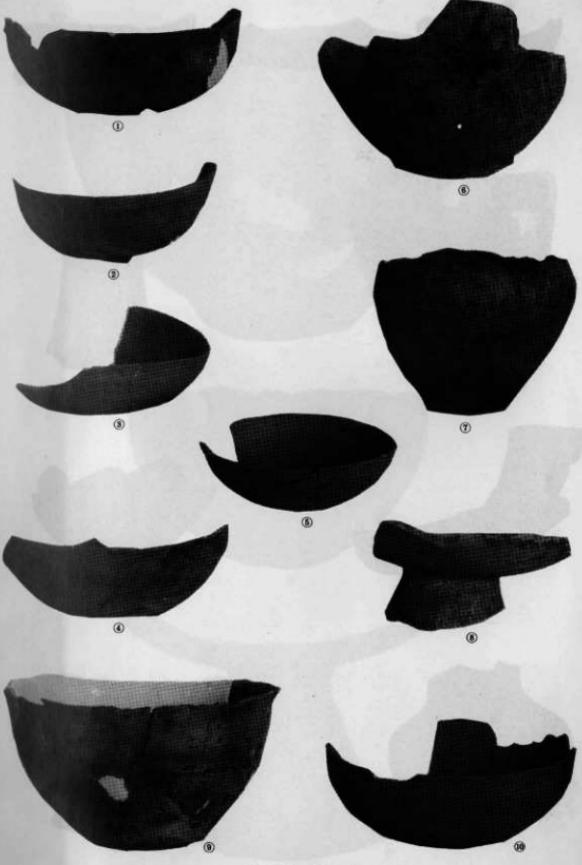


图版15 202号住居跡 (①~⑥)、203号住居跡 (⑦~⑫) 出土遺物

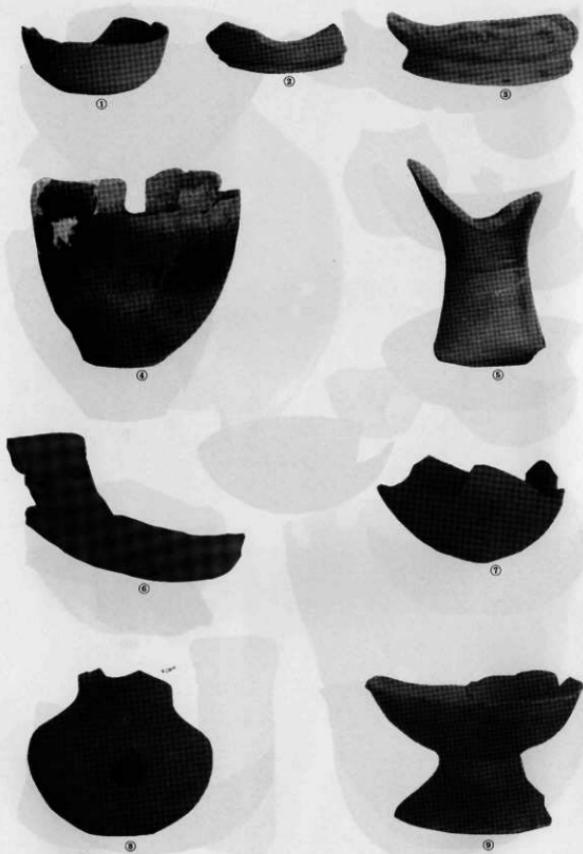
- 47 -



図版16 204号住居跡 (①~⑦) 出土遺物  
205号住居跡 (⑧~⑪) 出土遺物



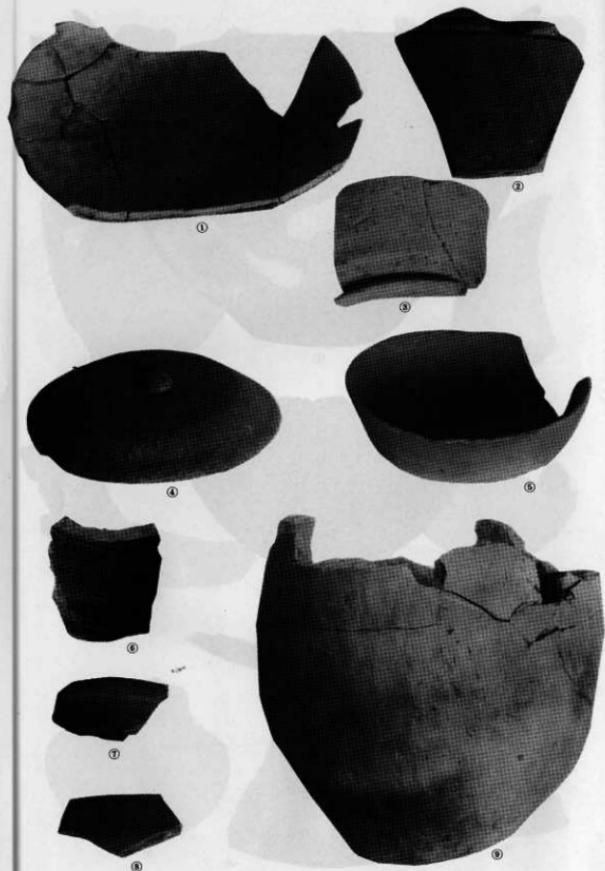
図版17 208号住居跡 (①~⑧) 出土遺物  
209号住居跡 (⑨、⑩) 出土遺物



図版18 210住居跡 (①~⑤)、1号溝 (⑥、⑦)  
9号溝 (⑧、⑨) 出土遺物



図版19 第2次調査におけるその他の出土遺物 (①~③)



图版20 301号住居跡（①～③）、303号住居跡（④、⑤）  
304号住居跡（⑥～⑧）出土遺物

- 52 -



图版21 304号住居跡（①、②）305号住居跡（③～⑥）  
307号住居跡（⑥）出土遺物

- 53 -



圖版22 308号住居跡 (①、②)  
11号溝 (③、④) 出土遺物

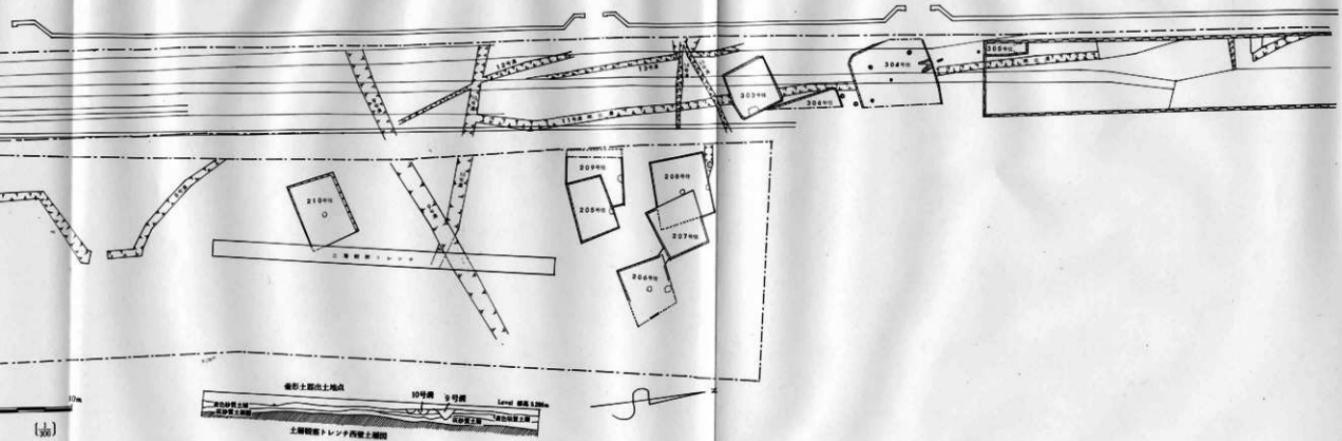
- 54 -



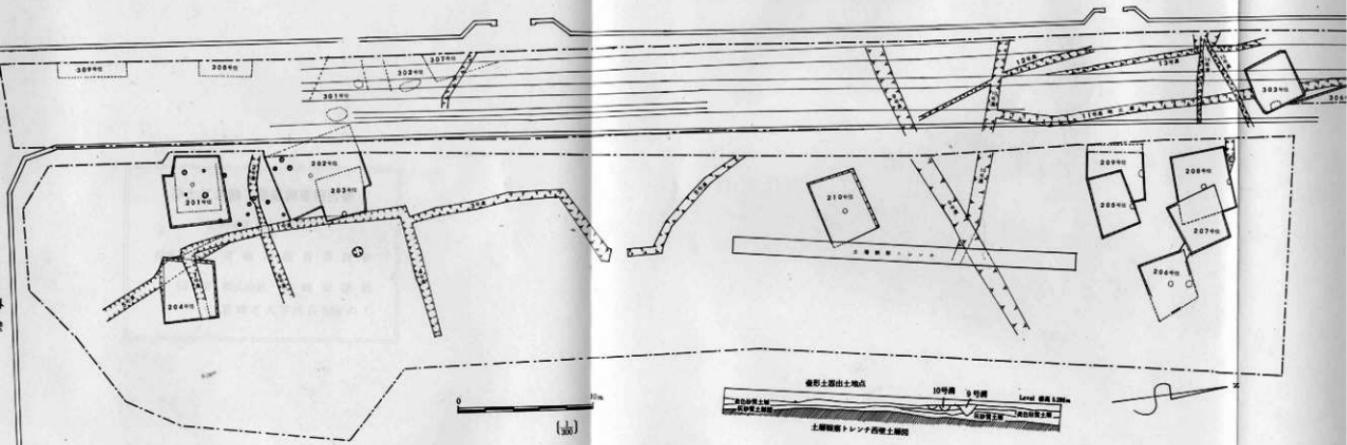
圖版23 11号溝 (①~⑤)  
14号溝 (⑥~⑧) 出土遺物

- 55 -

別添図 第2次、第3次調査構造配図



別添付図 第2次、第3次調査遺構配置図



地図右側、南北向、跡」の研究会組織図

浄土江遺跡 発掘調査報告書

昭和56年3月31日発行

編集・発行 宮崎市教育委員会

印刷 株式会社 宮崎南印刷  
宮崎市大字田吉 350 の 1